

立 野 遺 跡 村徳永遺跡(C地区)

平成元年 3 月

佐賀市教育委員会

佐賀市文化財調査報告書第24集

立 野 遺 跡 村徳永遺跡(C地区)

平成元年 3 月

佐賀市教育委員会

発刊にあたって

昭和61年度に開始された久保泉西部地区農業基盤整備事業は本年で3年目をむかえ、同地区での最初の発掘調査となりました。

本年は立野遺跡と村徳永遺跡（C地区）の発掘調査を実施しました。

立野遺跡では弥生時代の住居跡、井戸、土壇、周溝状遺構、村徳永遺跡（C地区）では中世の井戸、土壇、溝を検出しました。

これらの遺構は、集落を研究する上で重要な資料ということが出来ます。

久保泉地区は遺跡の宝庫といわれていますが、発掘調査はその緒についたばかりです。今後とも大方の御意見・御指導をお願いする次第ですが、本書がそのための資料となれば幸甚に存じます。

なお、この調査にあたり、関係機関並びに地元の方々の御理解と御協力に対し、心から厚くお礼を申し上げます。

平成元年3月31日

佐賀市教育委員会

教育長 山 田 清 人

例 言

1. 本書は、農業基盤整備事業に伴い、発掘調査を実施した立野遺跡・村徳永遺跡（C地区）の報告書である。
2. 発掘調査は佐賀県と佐賀市が埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結し、佐賀市教育委員会が実施した。
3. 遺構の実測は新九州測量設計株式会社に委託した。
4. 報告書作成に係る業務分担は次のとおり。

遺物復元 西首金子、鬼崎玲子

遺物実測・製図 浜田糸子、神代文香、浜野里美、島京子

遺構写真 個別遺構 木島慎治、福田義彦、バルーン撮影、双建工業株式会社（委託）

遺物写真 福田義彦

報告書執筆 福田義彦

目 次

I 序説	1	(2) 竪穴住居跡	8
1. 調査に至る経過	1	SB010 住居跡	8
2. 調査の組織	1	SB011 住居跡	9
II 位置と環境	2	SB014 住居跡	9
1. 地理的環境	2	SB016 住居跡	10
2. 歴史的環境	3	SB019 住居跡	10
III 調査の概要	3	SB020 住居跡	11
1. 立野遺跡	3	(3) 土壇	12
(1) 掘立柱建物跡	4	SK004 土壇	12
SB001 掘立柱建物跡	4	SK008 土壇	12
SB003 掘立柱建物跡	5	SK009 土壇	13
SB004 掘立柱建物跡	5	SK010 土壇	13
SB015 掘立柱建物跡	6	SK012 土壇	13
SB017 掘立柱建物跡	6	SK019 土壇	14
SB018 掘立柱建物跡	7	SK029 土壇	15
SB023 掘立柱建物跡	7	SK033 土壇	15
SB025 掘立柱建物跡	8	SK034 土壇	16
SB026 掘立柱建物跡	8	SK007 大型土壇	16

SK016 大型土壇	17	SK001 土壇	26
SK032 大型土壇	17	SK002 土壇	27
(4) 周溝狀遺構	18	SK003 土壇	28
SX001 周溝狀遺構	18	SK011 土壇	28
SX002 周溝狀遺構	19	SK012 土壇	29
SX003 周溝狀遺構	19	SK014 土壇	30
(5) 井戸	20	(2) 井戸	30
SE001 井戸	20	SE001 井戸	30
SE003 井戸	20	SE002, 3 井戸	30
SE004 井戸	21	SE004 井戸	31
(6) 溝	21	(3) 溝	31
(7) 立野遺跡出土遺物	21	(4) 村徳永遺跡C地区出土遺物	31
2. 村徳永遺跡C地区	26	3. まとめ	35
(1) 土壇	26		

図版目次

図版 1 立野遺跡全景	図版 4 SK012 土壇
図版 2 SB001 掘立柱建物跡	SK019 土壇
SB003, 4 掘立柱建物跡	SK029 土壇
SB015 掘立柱建物跡	SK033 土壇
SB017 掘立柱建物跡	SK034 土壇
SB018 掘立柱建物跡	SK007 大型土壇
SB023 掘立柱建物跡	SK007 土層断面
SB025 掘立柱建物跡	SK007 土層断面
SB026 掘立柱建物跡	図版 5 SK016 大型土壇
図版 3 SB010, 011 堅穴住居跡	SK032 大型土壇
SB011 堅穴住居跡	SK032 大型土壇土層断面
SB016 堅穴住居跡	SK032 大型土壇土層断面
SB019, 020 堅穴住居跡	SX001 周溝狀遺構
SK004 土壇	SX001 周溝狀遺物検出状況
SK008 土壇	SX002 周溝狀
SK009 土壇	SX003 周溝狀
SK010 土壇	図版 6 村徳永遺跡 (C地区)

図版 7 発掘調査状況

図版 8～12 立野遺跡・村徳永遺跡（C地区）

出土遺物

凡 例

1. 遺構はSK：土壌、SB：住居跡、SE：井戸、SD：溝、SX：性格不明遺構の分類記号で示す。
2. 遺構の寸法数字はm単位、遺物の寸法数字はcm単位とした。
3. 方位はすべて座標北である。
4. 遺構番号は種別毎に通し番号を付した。
5. 遺跡略号は立野遺跡（TAT）、村徳永遺跡（C地区）（MTN-C）とした。

I. 序 説

1. 調査に至る経過

昭和61年度から実施されている、久保泉西部地区農業基盤整備事業は、昭和63年度で3年目をむかえ、その事業面積も初年度の6.7haから16haと拡大してきている。昭和63年度農業基盤整備事業に先だち、昭和62年度秋に埋蔵文化財確認調査を実施した。その結果6,800㎡の広がりをもつ遺跡を確認した。この調査結果を基礎に佐賀県農林部、佐賀県教委、佐賀市土地改良課、佐賀市教育委員会の四者で埋蔵文化財の保護に関する協議を実施した。協議の結果、遺跡が水路により掘削される部分と、工事の切土により削平される部分の発掘調査（佐賀県農林部委託事業として5,100㎡を調査）を実施し、記録保存とすることとなった。

調査は東側の丘陵部分を立野遺跡、西側の微高地部分を村徳永遺跡（C地区）とし、昭和63年8月29日から着手し、昭和63年11月8日に終了した。発掘調査後の出土遺物整理は循誘収蔵庫で実施した。

2. 調査の組織

調査主体 佐賀市教育委員会

事務局 佐賀市教育委員会 社会教育課

参事兼課長 山口喜代治

課長補佐 中野 和彦
兼文化係長

事務吏員 甲木 亮一（庶務担当）

同 木島 慎治（調査担当）

同 福田 義彦（調査担当）

発掘作業員 内村美里、富永ツヤ子、角田千代乃、原ミチエ、生田美代子、広瀬八重子、後藤美智江、広瀬幸子、村川キクエ、橋本絹子、杉町スミ子、高蔵公子、宮地峯子、小出香澄、大野ユキエ、森田ツルヨ、宮地富子、小柳恵子、龍由美子、副島カスミ、友添丸子、畑瀬弘、角田キヌ子、亀川すえみ、松林公子、野中ツタエ、松林初代、山木江美子、立石千鶴子、木塚康子、武藤ツルヨ、緒方多美子、緒方敏子、下村保枝、小林澄子、松本ツル子、原京子、川上晶子、原ケサヨ、原ナミ子、山本初代、成富寿子、川崎真須美、原ツル

調査協力 佐賀県農林部、佐賀県教育委員会、佐賀市土地改良課、久保泉地区土地改良区、
(株)山豊建設、(株)新九州測量設計

II. 位置と環境

1. 地理的環境

(1) 立野遺跡

立野遺跡は佐賀市久保町大字下和泉字六反田に所在し、佐賀市域の北東部に位置する。周辺は大部分が水田であり、その中に南北にのびる低丘陵（又は微高地）が点在する。その中の一つが立野遺跡であり、水田からの比高約1m、標高8mを測る。

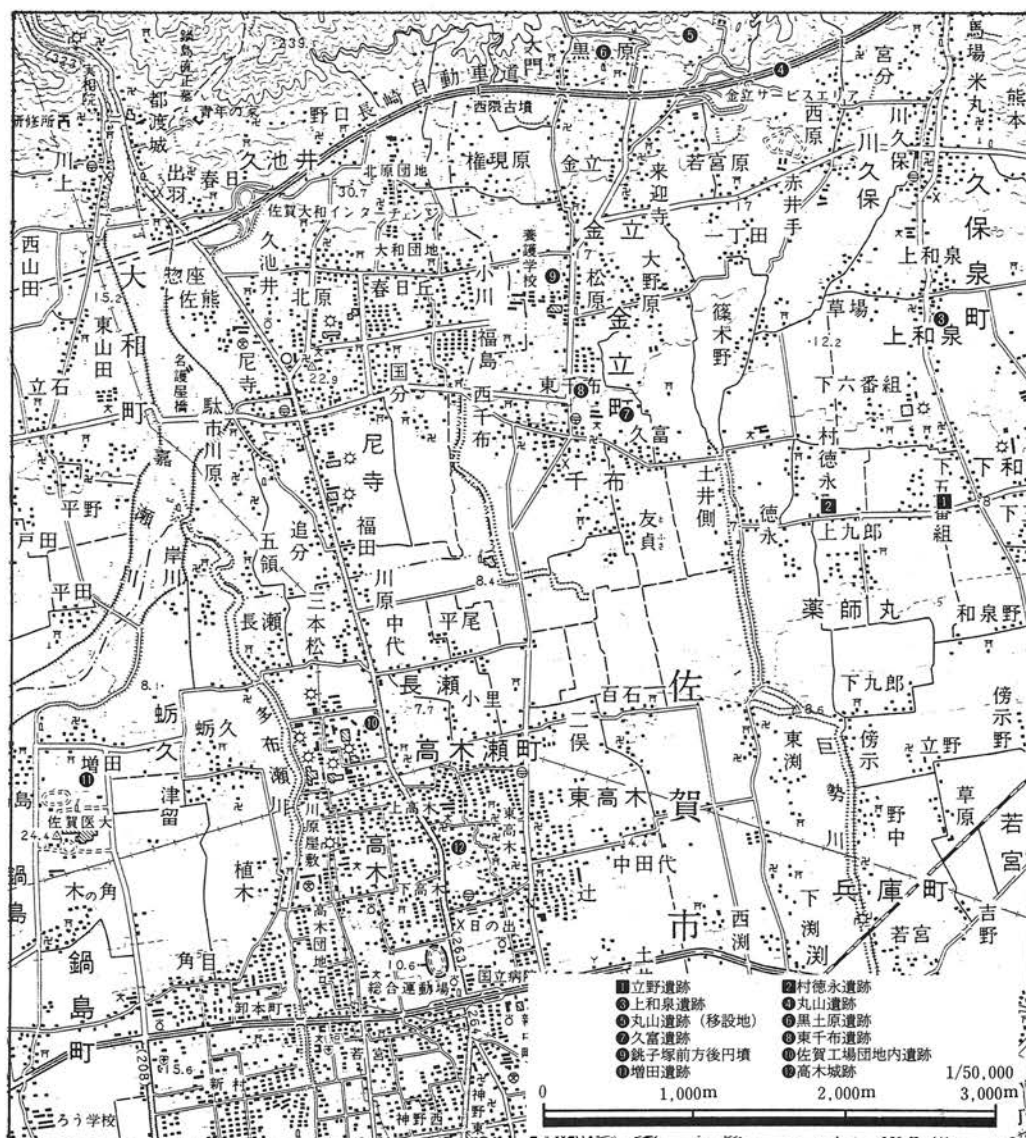


Fig. 1 周辺遺跡分布図

(2) 村徳永遺跡 (C地区)

村徳永遺跡は佐賀市久保泉町大字上和泉字徳永に所在する。巨勢川中流域の東岸600mに位置し、立野遺跡からは西に1kmの距離にある。この地区は南西部30mにある白鬚神社境内につづく同一の微高地であったが、現況はその間が水田化され、独立した微高地となっている。標高は7.5m、周囲の水田との比高約0.5mを測る。

2. 歴史的環境

周辺は埋蔵文化財包蔵地として周知されている土地である。しかし調査例は少なく、以下に述べる遺跡が同地区周辺の本調査を実施したものである。泉遺跡（昭和60年度調査、中世から近世の集落跡）、泉三本栗遺跡（昭和61年度調査、弥生時代、古墳時代、中世の集落跡）、上和泉遺跡（昭和62年度調査、古代から近世の集落跡）。

これらは昭和60年度から開始された久保泉地区農業基盤整備事業に伴い発掘調査を実施したものであり、少しずつではあるが、周辺の遺跡の様相がわかってきた。また、立野遺跡、村徳永遺跡の北方約1kmには久保泉工業団地（仮称）が計画されている。計画面積53haのうち、現在までに41.5haの範囲で確認調査を実施し、9地区に弥生から近世に至る、合計40,000㎡の遺跡を確認した。

久保泉農業基盤整備地区周辺は本調査例こそ少ないが、広い範囲で遺跡が存在する。今後の発掘調査で久保泉地区の歴史がより明らかになるものと考ええる。

III. 調査の概要

立野遺跡は支線道路BIV-22号と幹線水路IV-9号との間にある標高7.65から8.06mを測る低丘陵で、調査面積は4,500㎡。水田との比高は1mから1.3mを測り、全域が削平計画地であった。

本遺跡では弥生時代中・後期、中世の遺構を検出した。検出遺構には竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土壇、周溝状遺構、井戸・溝・ピット群がある。主な出土遺物には弥生時代の鉢・甕・高坏・石包丁、中世の遺物として小皿がある。遺跡面積の割には出土遺物量は少ない。

村徳永遺跡 (C地区) は白鬚神社北東部50mの標高7.58mから7.86mを測る微高地である。水田との比高差0.6mを測り、調査面積は600㎡。

本遺跡では中世の遺構を検出した。検出遺構としては土壇、井戸、溝、ピット群がある。主な出土遺物には土師器杯・皿、瓦器塀などがある。

1. 立野遺跡

住居跡

本遺跡で掘立柱建物跡（14棟）と竪穴住居跡（11軒）を検出した。前者は5種に大別でき丘

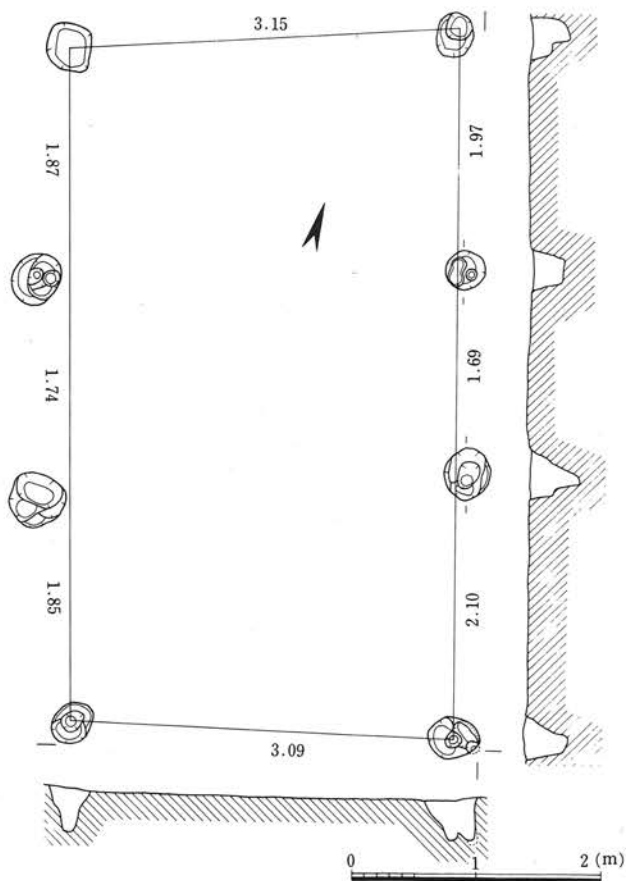


Fig. 2 SB001掘立建物跡実測図 (S = 1/60)

中心間で測った距離を表記している。以下 SB025 まで同様に記載する。

陵の西寄の位置に北端から南端まで分布している。後者は隅丸方形を基調とした竪穴住居跡であるが、保存状況が良好である低丘陵上に位置するにもかかわらず、掘込み深度が0.1m内外と浅い。この遺構の分布状況も前者同様の位置であるが、丘陵南北端までは及んでいない。

これらの掘立柱建物跡、竪穴住居跡群の中で残存状況の良いものや、特徴的なものを抽出し後述する。

(1) 掘立柱建物跡

SB001 掘立柱建物跡 (Fig. 2)

調査区北西端にあり、この規模のものは本遺跡で唯一のものである。1間×3間の建物で、竪穴の大きさは径0.3mから0.4m、深さ0.25mから0.35m。柱穴間の距離は図のとおりである。なお柱筋は多少の出入りがあるので、基本的には各柱穴の中央を柱筋がとおるものとし、その

SB003掘立柱建物跡
(Fig. 3)

調査区中央にあり、
SB004 掘立柱建物跡
と重複しているが、柱
穴の切合関係は認めら
れない。2 間×1 間の
建物で東西方向が梁、
南北方向が桁か。柱穴
の径は0.4mから0.6m、
深さ0.35mから0.5m
を測る。柱間の距離は
図のとおりであるが一
定しない。梁中央の柱
は両側とも外側にはみ
出している。

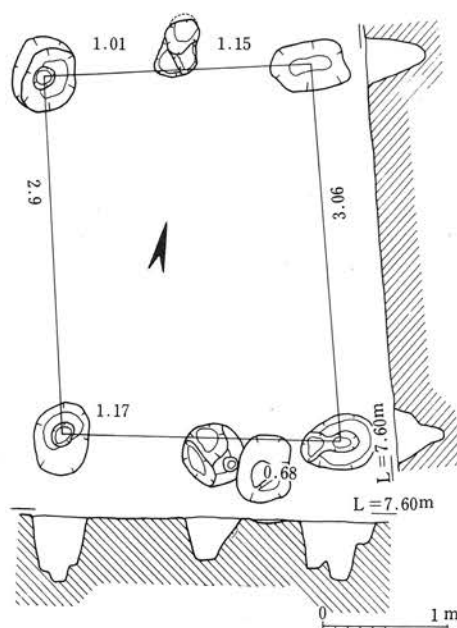


Fig. 3 SB003掘立柱建物跡実測図 (S = 1/60)

SB004掘立柱建物跡
(Fig. 4)

調査区の中央にあり、
桁の主軸はSB003と
直交する位置関係にあ
る。2 間×1 間の建物
で南北方向が梁、東西
方向が桁。柱穴の径は
0.4mから0.65m、深さ
0.45mから0.62m。比
較的規模の大きい柱穴
の部類に入る。梁中央
の柱穴はほぼ柱筋にあ
る。

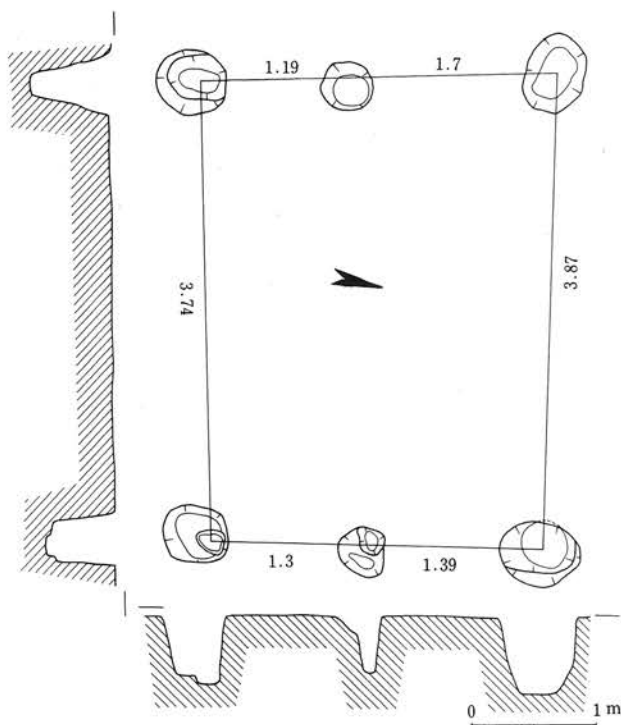


Fig. 4 SB004掘立柱建物跡実測図 (S = 1/60)

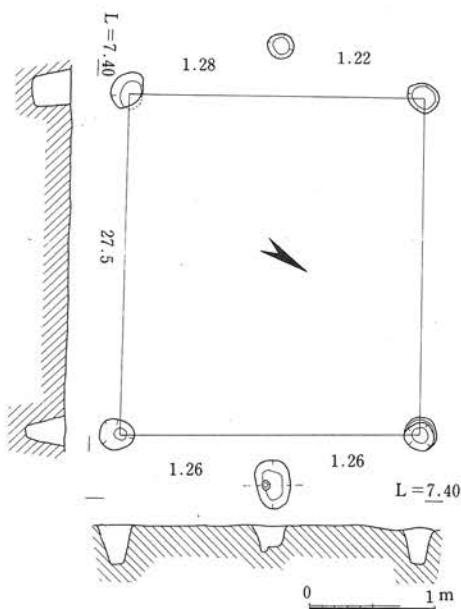


Fig. 5 SB015掘立柱建物跡実測図
(S = 1/60)

SB015 掘立柱建物跡 (Fig. 5)

調査区中央西端にある、2間×1間の建物である。東西方向が梁、南北方向が桁。柱穴の径は0.25mから0.37m、深さ0.27mから0.45m。小規模の柱穴としてはやや深さがある。桁方向主軸が最も西傾するもので、梁中央の柱穴は両方とも柱筋から外側にはずれている。

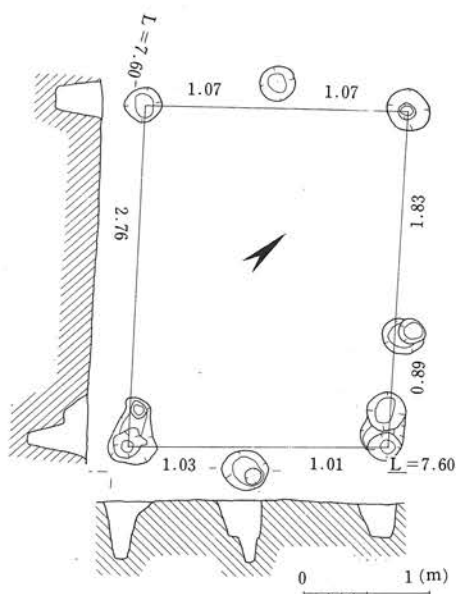


Fig. 6 SB017掘立柱建物跡実測図

SB017 掘立柱建物跡 (Fig. 6)

調査区中央南寄りにある、2間×1間の建物である。東西方向が梁、南北方向が桁。柱穴の径は0.20mから0.38m、深さ0.2mから0.3m。柱穴規模は総じて小型である。梁中央の柱穴は両方とも大きく小型である。梁中央の柱穴は両方とも大きく柱筋からはずれており、深さも他のものと較べて浅い。

SB018掘立柱建物跡

(Fig. 7)

調査区南部にあり、規模は、柱穴と考えられるピット総数21基。東西方向が梁、南北方向が桁と考えるが、間数は表現しがたい。梁の中央部に、柱筋から大きくはなれ、長径0.5m程度のピットが南北にそれぞれ配されている。柱穴の深さは0.2から0.6mを測り均一でない、柱筋の表示は、調査時に主なる柱穴と考えられるものを主体として引いてみたが、図上で考えると他の設定も考えうる。

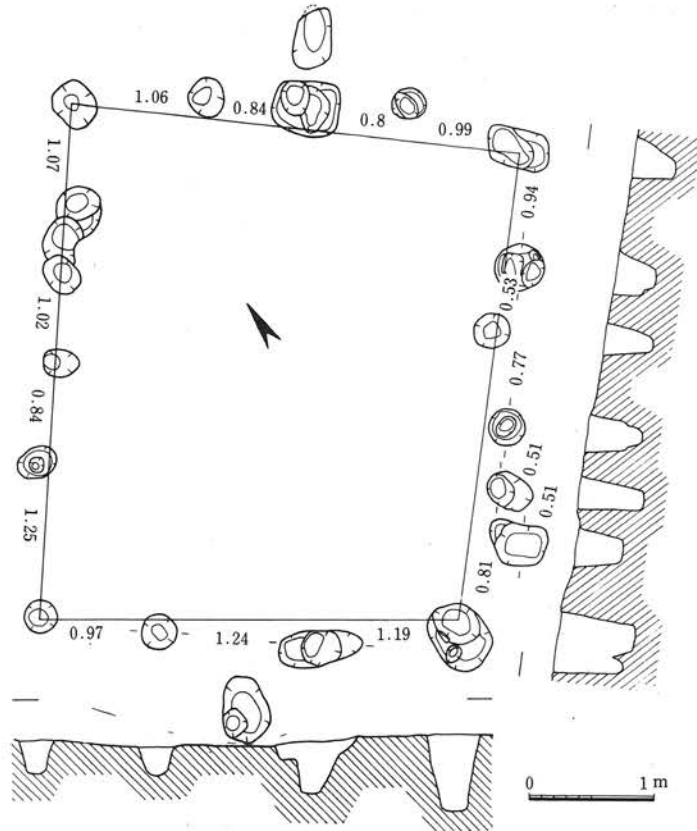


Fig. 7 SB018 掘立柱建物跡実測図 (S = 1/60)

この建物はSB017などに見るように梁中央の柱穴が、柱筋から外側にずれるタイプに属するが、さらに外側に1基ずつのピットがある。規模の差異はもちろんのことであるが、上部構造が基本的に違うものかも知れない。

SB023 掘立柱建物跡 (Fig. 8)

調査区南部にあり、SB018と同種の規模・形状である。柱穴と考えられるピットは総数21基。SB018と主軸方向を同一としている。間数は3間×3間か。柱穴の径は0.13mから0.65mを測るが、0.2mから0.3mが平均的な規模である。深さは0.1mから0.4m、SB018と比較して総じて柱穴が小さい。

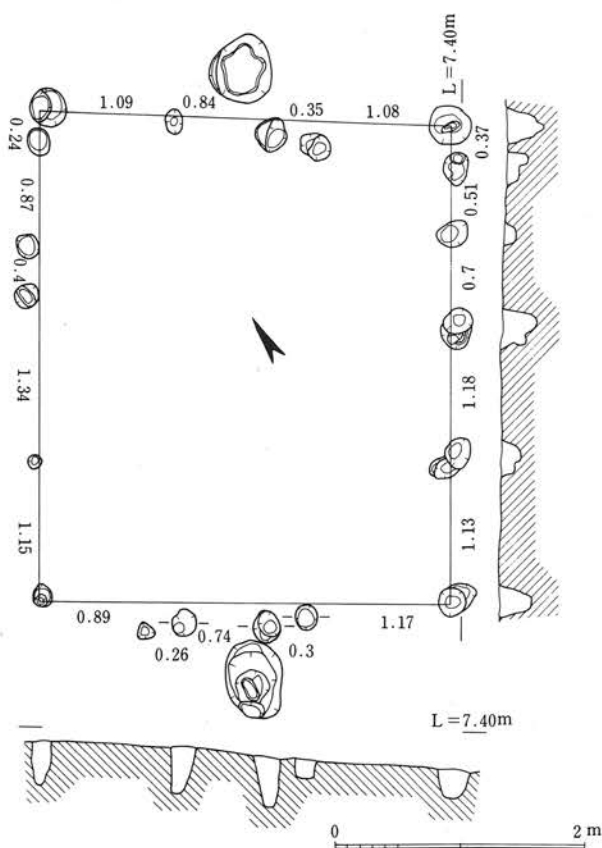


Fig. 8 SB023掘立柱建物跡実測図 (S = 1/60)

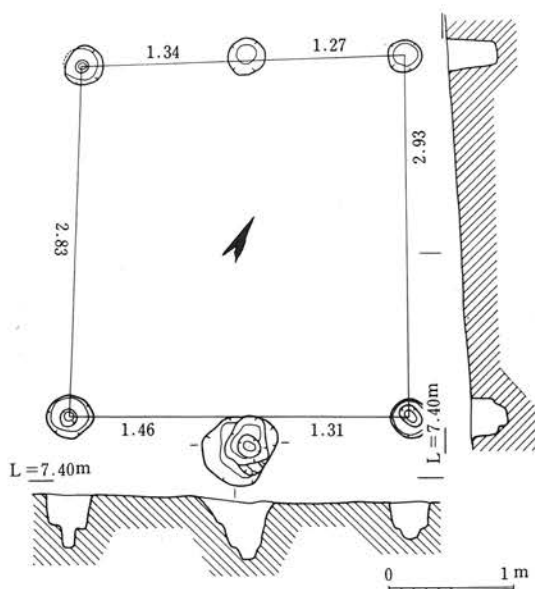


Fig. 9 SB025掘立柱建物跡実測図 (S = 1/60)

SB025 掘立柱建物跡 (Fig. 9)

調査区の中央東端にあり、他の建物跡からやや離れた地点に位置する。2間×1間で東西方向が梁、南北方向が桁。柱穴の径は0.25mから0.6m、深さ0.3mから0.56m。南側梁中央のものが最も大きく、柱筋からも外側にそれる。

SB026掘立柱建物跡 (Fig. 10)

調査区中央、やや西寄りに位置する。1間×1間の建物で東西方向が梁、南北方向が桁。この様式の建物では最も桁幅が長い。柱穴の径は0.4mから0.45m、深さ0.56mから0.62m。

(2) 竪穴住居跡

SB010 住居跡 (Fig. 11)

調査区の中央にあり、掘込み面の標高は7.6m。東南隅をSB011に切られている。上面の平面形は隅丸長方形を基調とするもので、長軸4.79m、短軸3.5m、深さ0.07mを測る。床面積が最も大きい一群の一つである。床面は緩やかな起伏があり、東壁際中央部が最も深く0.15mを測る。床面には3か所にピット、2か所に土壇状の掘込みがあるが、最深部でも0.14mと浅く、柱穴とは考え難い。

SB011 住居跡 (Fig. 12)

調査区の中央にあり、掘込み面の標高は7.6m。SB010を切る。床面積が最も小さい一群の一つである。上面の平面形は隅丸長方形を基調とし、長軸2.4m、短軸2.1m、深さ0.09mを測る。床面は緩やかな起伏があり、北西部床面にはSB010の東南隅にあたる掘方を一部確認した。南寄りに2か所、土壌状の掘込みを有するが、最深部でも0.15mと浅い。

埋土は黒色を呈し、遺物は石鑿を1個体検出した。

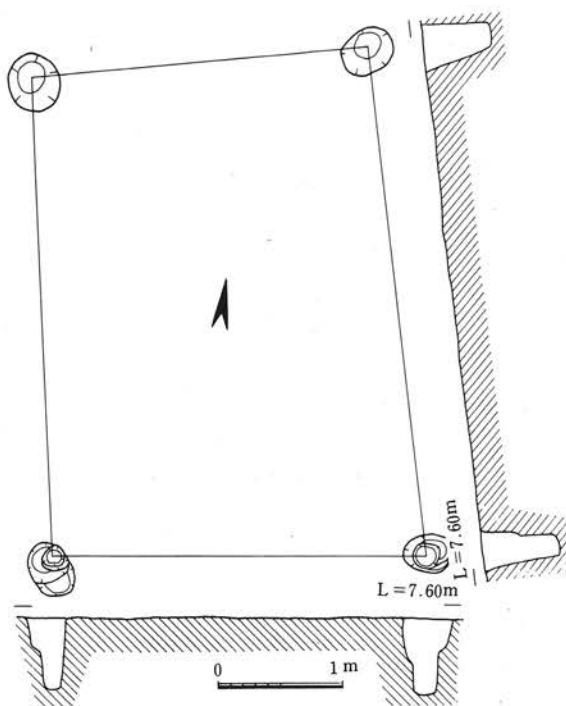


Fig. 10 SB026掘立柱建物跡実測図 (S = 1/60)

SB014 住居跡 (Fig. 13)

調査区の中央西寄りにあり、掘込み面の標高は7.5m。住居跡規模では中型のもので、この種のものが数量的には最も多い。上面の平面形は隅丸長方形を呈し、長軸4.1m、短軸3.0m、深さ0.1mを測る。床面は小さい起伏があるものの概ね平坦である。床面及び壁際に計8か所にピットを確認した。北西壁の2基と東南隅の1基は、もし柱

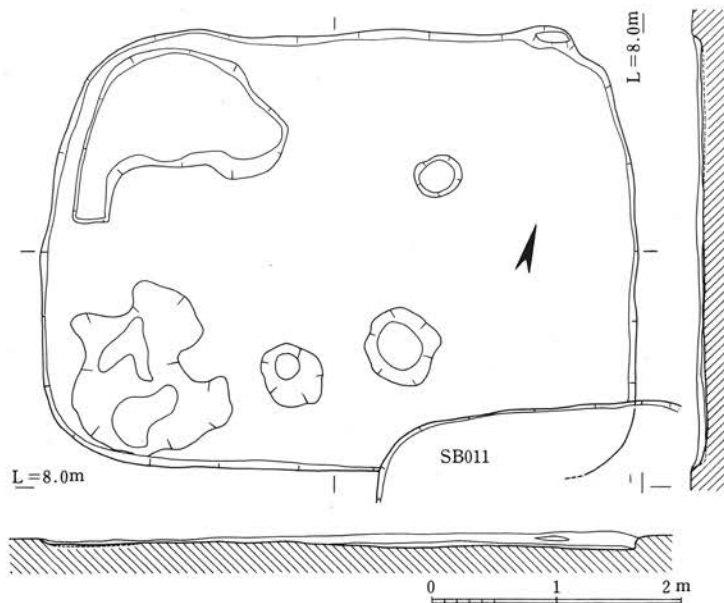


Fig. 11 SB010住居跡実測図 (S = 1/60)

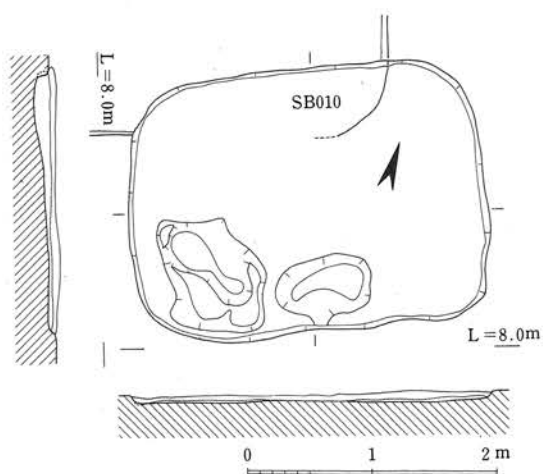


Fig. 12 SB010住居跡実測図 (S = 1/60)

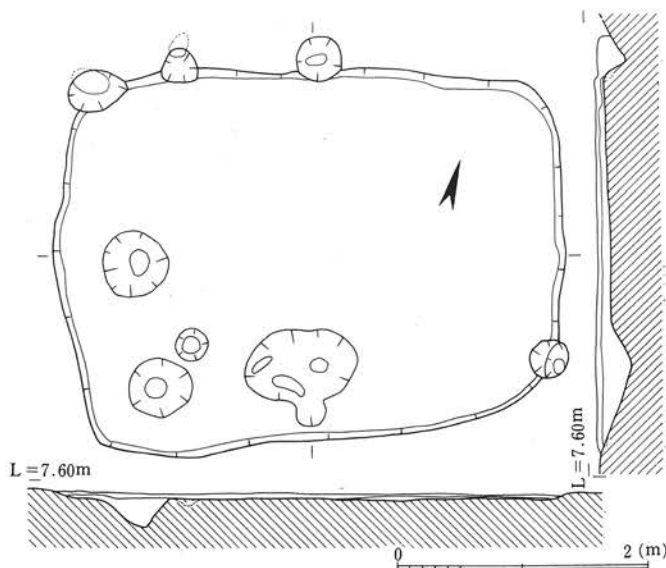


Fig. 13 SB014 住居跡実測図 (S = 1/60)

隅丸長方形を基調とするもので、検出長軸2.25m、短軸2.3m、深さ0.08mを測る。床面はほぼ平坦であり、東のSB020と同レベルである。床面南半に3基のピットを検出した。最深部で床面から0.22mを測る。

埋土は黒色で、南部域の住居跡の埋土は一樣に砂粒を含んでいる。遺物は埋土中から石包丁（未製品）を検出した。

を建てるとしたら内傾するような掘方であり注視されるが、柱穴に断定はできない。

SB016 住居跡 (Fig. 14)

調査区の中央西端にあり、西壁掘方を削平されている。掘込上面の標高は7.3m。上面の平面形は隅丸長方形を基調とするもので、検出長軸4.1m、短軸3.0m、深さ0.1mを測る。長方形土壌状のものは植栽による攪乱、床面はほぼ平坦で6か所にピットを検出した。

最も掘込みの深いもので床面から0.16m。

埋土は黒色を呈し、南壁寄りで弥生土器片・砥石を検出した。

SB019 住居跡 (Fig. 15)

調査区南部にあり、掘込み面の標高は7.3mを測る。東壁をSB020の西壁と切れあっているが、新旧関係は不明。当初、SB020の拡張部分とも考えたが、SB011が示すような小規模住居もあるので別個体と判断した。上面の平面形は

SB020 住居跡 (Fig. 15)

切合い関係及び標高は前述のとおり。上面の平面形は隅丸長方形を基調とするもので、検出長軸3.7m、短軸3.0m、深さ0.07mを測る。溝状遺構に切られている。南壁寄りに7基のピットを検出した。最深のもので床面から0.3mを測る。土出遺物はない。

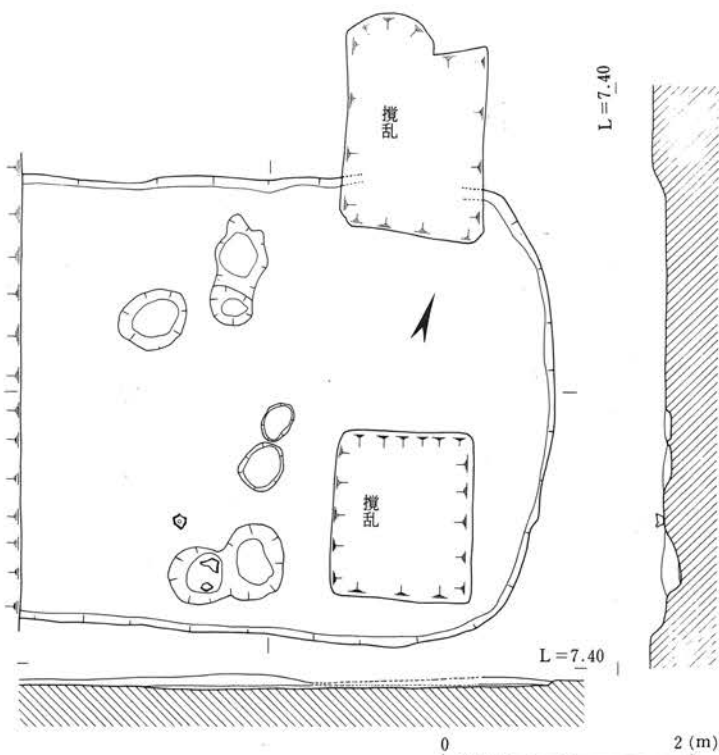


Fig. 14 SB016住居跡実測図 (S = 1/60)

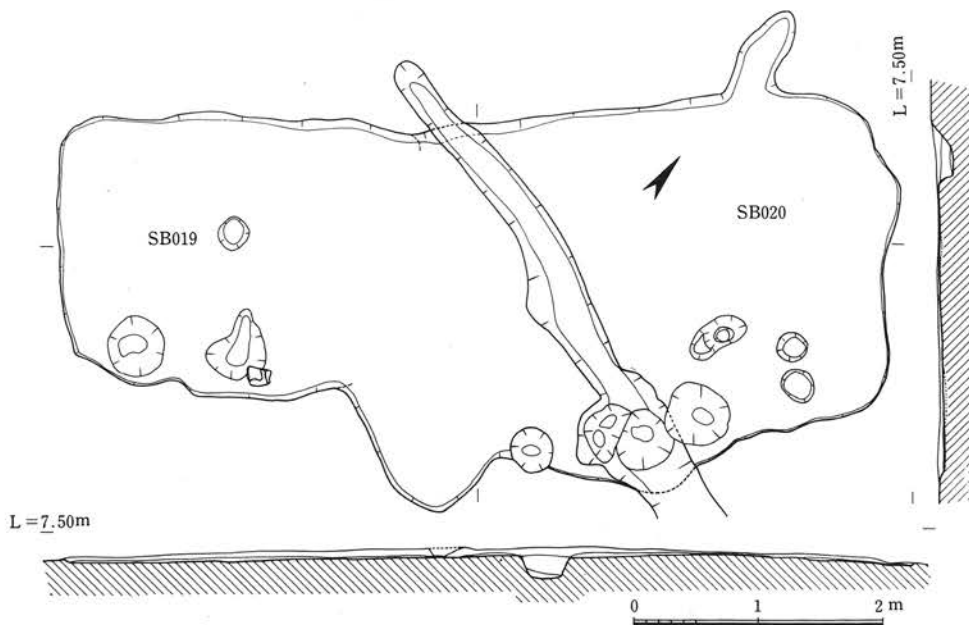


Fig. 15 SB019, 020住居跡実測図 (S = 1/60)

(3) 土墳

当遺跡で38か所に検出した。ほとんど切あうことはなく全域に分布する。形状は隅丸長方形、楕円形、不定形など多様である。この中に大型土墳も含まれるが、時期・形状が特異であったのでまとめて後述する。

SK004 土墳 (Fig. 16)

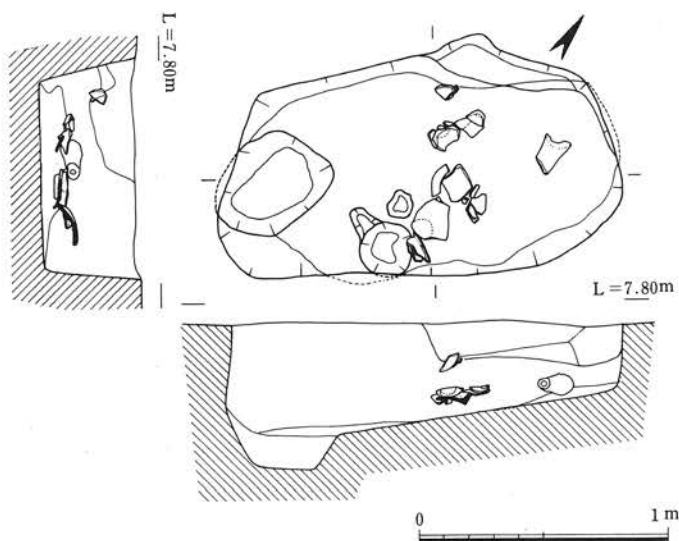


Fig. 16 SK004土墳実測図 (S = 1/30)

調査区の北部中央にあり、掘込面の標高は7.7 m。上面の平面形は楕円形を基調とするもので、長軸1.57m、短軸0.9m、深さ0.38mを測る。床面は東から西に傾斜があり、西壁部には一部袋状を呈するピットがある。壁面は角度をもって立ち上る。

埋土は黒褐色を呈し、遺物は下層から甕・高坏等を検出した。弥生期の遺物である。

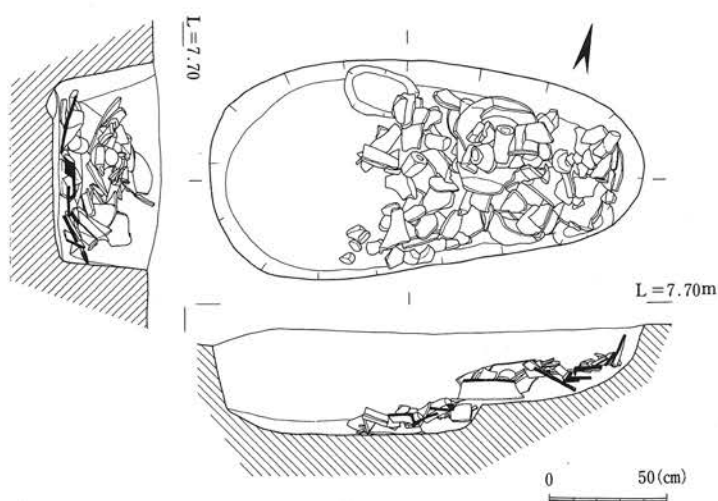


Fig. 17 SK008土墳実測図 (S = 1/30)

SK008 土墳 (Fig. 17)
調査区の北部西寄りにあり、掘込面の標高は7.6 m。上面の平面形は楕円形を呈するが、東部がやや狭くなる。長径1.33m、短径0.83m、深さ0.43mを測る。床面は2段掘の様相を呈し、西半部が東半部より0.1m程度深い。壁は南北壁が特に角度をもって立ち上る。

埋土は黒褐色を呈し、

遺物は埋土下層、東半部に集中して検出した。床直で一括資料である。器種には高坏・甕・器台等がある。

SK009 土壇 (Fig. 18)

調査区の北部西寄りにあり、掘込み面の標高は7.6m。上面の平面形は円形土壇が2つ切れあっているような様相を呈するが、元来、楕円形を基調としたものとする。長径1.33m、短径0.77m、深さ0.25mを測る。床面はわずかな起伏があり、壁は比較的角度をもって立ち上る。床面には径0.2から0.3m程度のピットが3か所にある。

埋土は黒褐色を呈し、遺物は南西部下層から甕を検出した。甕底部を2個体分検出したが双方共穿孔を有する。

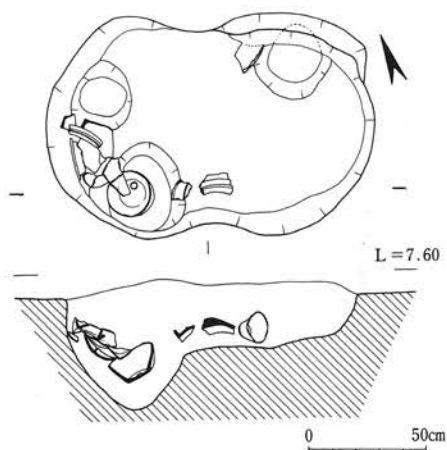


Fig. 18 SK009土壇実測図 (S = 1/30)

SK010 土壇 (Fig. 19)

調査区の北部にあり、掘込み面の標高7.6m。上面の平面は不定形を呈するが元来楕円を呈していたものとする。長軸1.29m、短軸0.84m、深さ0.32mを測る。床面はわずかに舟底状を呈し、西壁が急角度に、東壁がなだらかに、直線的にのびる。

埋土は黒褐色を呈し、遺物は壺・甕等を検出した。

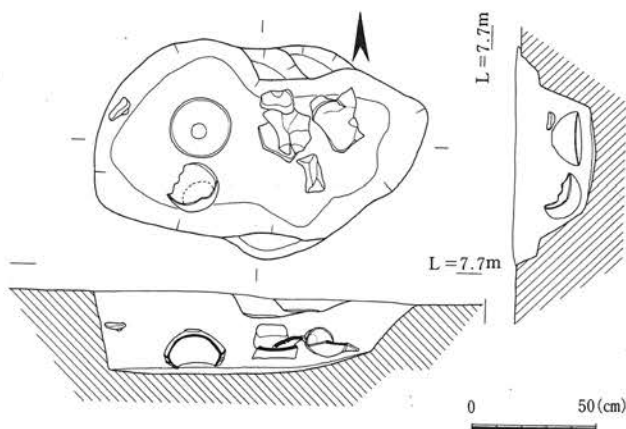


Fig. 19 SK010土壇実測図 (S = 1/30)

SK012 土壇 (Fig. 20)

調査区の中央東寄りにあり、北西部0.5mにSK011がある。掘込み面の標高は7.4m。上面の平面形は不定形を呈するが、元来楕円形を基調としていたものとする。長軸2.66m、短軸1.23m、深さ0.32mを測る。床面は東半部は平坦であるが、西半部が一段深くなって壁面は袋状を呈する。

埋土は黒褐色を呈し、遺物は東半部下層から検出した。器種には甕、高坏などがある。

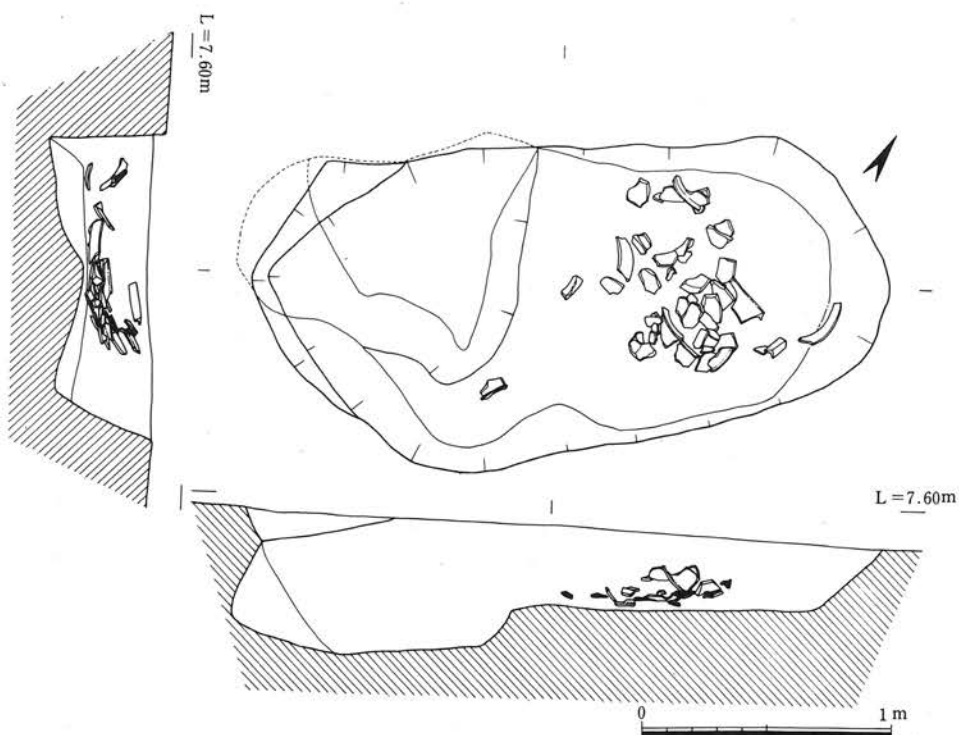


Fig. 20 SK012土坑実測図 (S = 1/30)

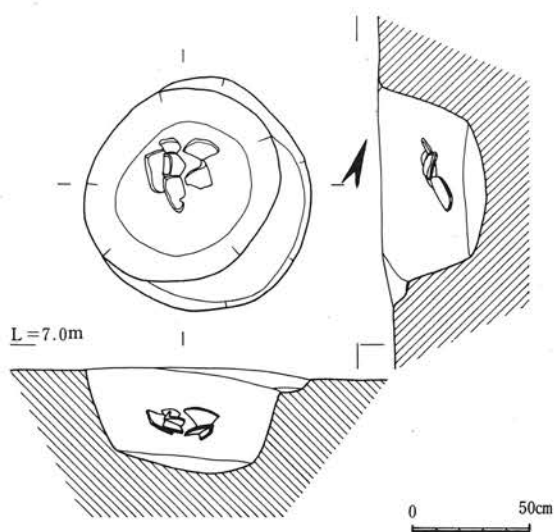


Fig. 21 SK019土坑実測図 (S = 1/30)

SK019 土坑 (Fig. 21)

調査区中央東端にあり、掘込み面の標高は6.9m、上面の平面形は円形を基調とするが、南北径がやや長く、長径0.93m、短径0.9m、深さ0.42mを測る。床面の断面は舟底状を呈し、壁は内湾気味に立ち上る。東部掘込みに半月形のテラスがあり、遺構が重複している様相を呈するが、埋土色調の区別はできなかった。

埋土は黒褐色を呈し、掘込み下0.3mで甕（破片）を検出した。

SK029 土墳 (Fig. 22)

調査区南半の西寄りに位置し、掘込み上面の標高は7.2m。SB016とSB018の間にある。上面の平面形は隅丸長方形を呈するが、もとは角張っていた可能性がある。長軸1.51m、短軸0.9m、深さ0.36mを測る。床面の断面は舟底状を呈するが、北東部にテラス状の部分がある。東西壁は角度をもって立ち上がるが、南北壁はゆるやかにのびる。

埋土は黒褐色を呈し、下層から多量の土器片を検出した。土器は東北隅と南西隅をのぞいて、敷つめたような状況で検出した。器種には甕・高坏などがある。

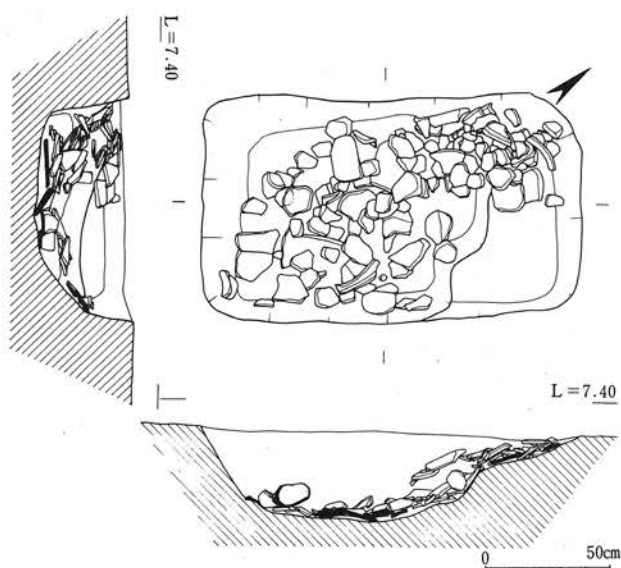


Fig. 22 SK029土墳実測図 (S = 1/30)

SK033 土墳 (Fig. 23)

調査区南部にあり、掘込み面の標高は7.9m。南西部をSD012に切られている。上面の平面形は楕円形を基調としたもので、長軸1.51m、短軸0.9m、深さ0.36mを測る。床面の断面は舟底状を呈す。東壁中央部に長軸0.3m、短軸0.2m、深さ0.05m程度のピットがある。

埋土は黒色を呈するが、SD012の黒色埋土よりやや褐色をおびる。遺物は遺構中央部で集中して検出した。器種には甕・高坏などがある。

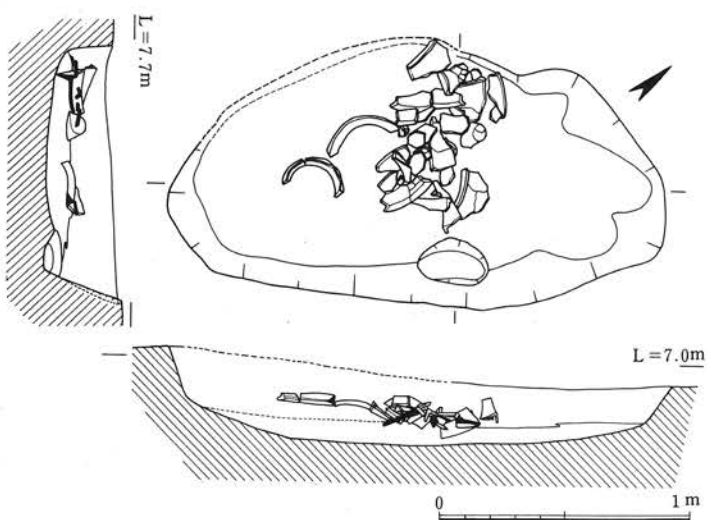


Fig. 23 SK033土墳実測図 (S = 1/30)

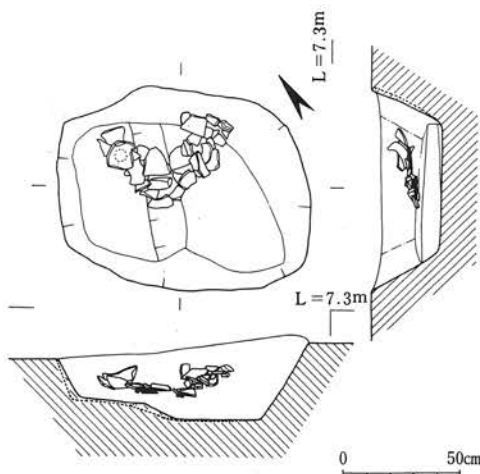


Fig. 24 SK034土坑実測図 (S = 1/30)

調査区南半の東端部にあり掘込み面の標高は7.1m。上面の平面形は隅丸長方形を呈するが、東壁中央部がやや外側に突出している。長軸1.01m、短軸0.81m、深さ0.28mを測る。北半部が浅くテラス状を呈する。埋土は黒褐色を呈し、遺物は掘込み下0.2m程度で検出した。出土状況は図のとおり東壁寄りに片寄っている。器種には甕がある。

SK034 土坑 (Fig. 24)

調査区南半の東端部にあり掘込み面の標高は7.1m。上面の平面形は隅丸長方形を呈するが、東壁中央部がやや外側に突出している。長軸1.01m、短軸0.81m、深さ0.28mを測る。北半部が浅くテラス状を呈する。

埋土は黒褐色を呈し、遺物は掘込み下0.2m程度で検出した。出土状況は図のとおり東壁寄りに片寄っている。器種には甕がある。

SK007 大型土坑 (Fig. 25)

調査区の北西隅にあり、掘込み上面の標高は7.7m。上面の平面形は隅丸長方形を呈し、主軸は東西方向、南部をSD003に切られている。長軸4.66m、短軸3.2m、深さ1.1mを測る。床面はわずかな起伏があるが、概ね平坦である。壁は比較的角度をもって立ち上り、床面から0.5m付近に稜をもつ。掘込み上面の面積は約14.9m²。

埋土は9層からなり淡黒色、淡黒褐色土を基調とする。最下層のIX層は黒色を呈する粘質土である。遺物は埋土中から微量検出したが、器種判別のできない土師器(土師質土器)であった。

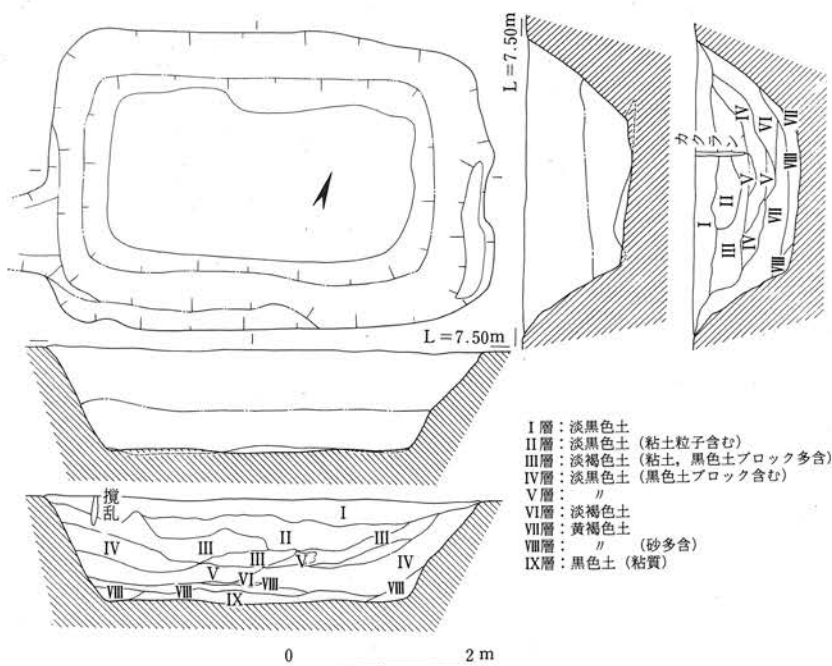


Fig. 25 SK007大型土坑実測図 (S = 1/80)

SK016 大型土 墳

(Fig. 26)

調査区の中央西端にあり、掘込み面の標高は7.4m。上面の平面形は隅丸長方形を呈し、主軸は東西方向。南西部に小ピットと切れ合い関係があるが、新旧は不明。長軸4.23m、短軸2.63m、深さ0.98mを測る。床面はほぼ平坦であり、壁は外反気味に立ち上る。東壁から北壁西端にかけて掘込み下0.4から0.5m付近に稜を有する。掘込み上面の面積は約11.1m²。

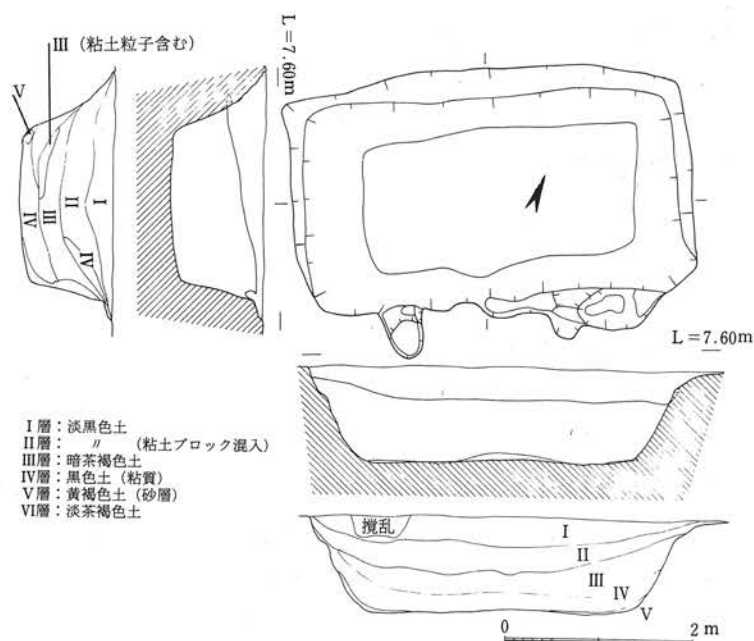


Fig. 26 SK016大型土墳実測図 (S = 1/80)

埋土は6層に分かれ淡黒褐色土を基調とする。2層は粘土ブロック多含。遺物は土師器片、滑石製品破片を検出した。

SK032 大型土 墳

(Fig. 27)

調査区の南端にあり、掘込み上面の標高は7m。上面の平面形は隅丸長方形を呈し、主軸は東西にとる。長軸4.37m、短軸2.42m、深さ0.7mを測る。SD012を切っている。床面はほぼ平坦であり、壁はこの種のものとしてはなだらかに立ち上る。四壁面には掘込み下0.2mから0.3mのどこ

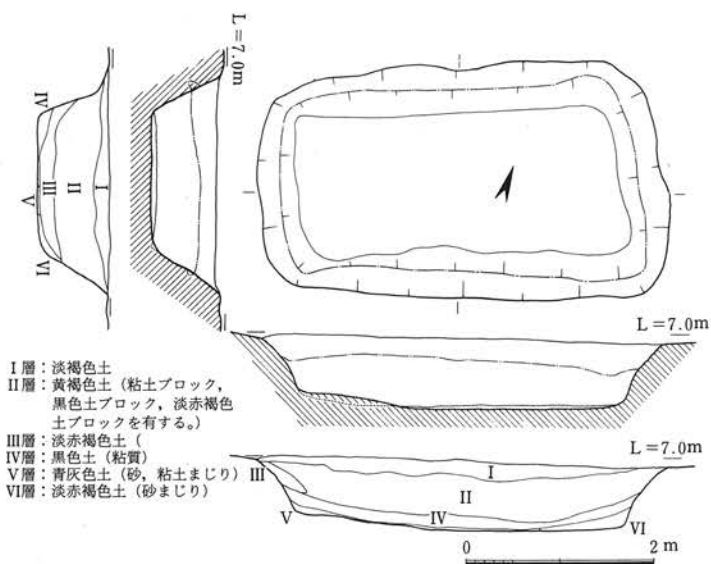


Fig. 27 SK032大型土墳実測図 (S = 1/80)

ろに稜がある。掘込み上面の面積は 10.6m^2 と大型土壌中最小。

埋土は5層からなり淡褐色を基調とする。II層が最も量的に多い層位であるが、写真にあるように粘土ブロックや黒褐色ブロックがあたかも「版築」でもしたかのような様相である。遺物は埋土中から土師器片、磁器片を微量検出した。

(4) 周溝状遺構

調査区北部と中央部の丘陵の背ともいうべき地点に2基所在する。また中央西端に溝の規模が同様にめぐり、隅丸方形を呈するものもこの項で記述する。

SX001 周溝状遺構 (Fig. 28)

調査区北部にあって中心部の標高は 7.7m を測る。遺構の南北外径 3.05m 、内径 2.3m 、東西外径 2.9m 、内径 2.2m を測り、上面の平面形はほぼ円を呈する。溝幅は 0.3m から 0.4m 、深さ 0.2m から 0.27m を測り、断面は逆台形を基調としている。北部をSD003溝に切られている。

埋土は大別すると2層に分類でき、上層が黒色、下層が淡黒褐色を呈する。遺物は周溝の北部に集中し、弥生土器の器台、甕片などを検出した。これらの遺物の中にまじって、長さ 0.8m の焼成による炭化木を検出した。この炭化木には加工痕はなく、自然木であったものとする。

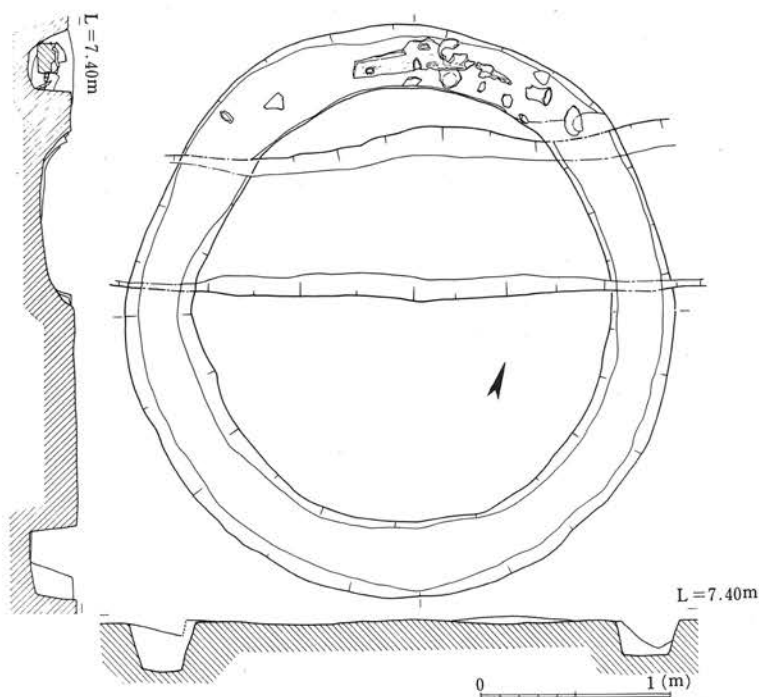


Fig. 28 SX001周溝状遺構実測図 (S = 1/40)

SX002 周溝状遺構

(Fig. 29)

調査区中央西端にあり、西側を水田造成時に削平されている。中心部の標高は7.5mを測る。中心部の南北外幅4.85m、内幅3.64m、残存部で東西外幅3.4m、内幅2.61mを測り、上面の平面形は円形に近い隅丸方形を呈する。溝幅は0.4mから0.7m、深さ0.2mから0.28mを測り、断面は逆台形を基調としたものである。

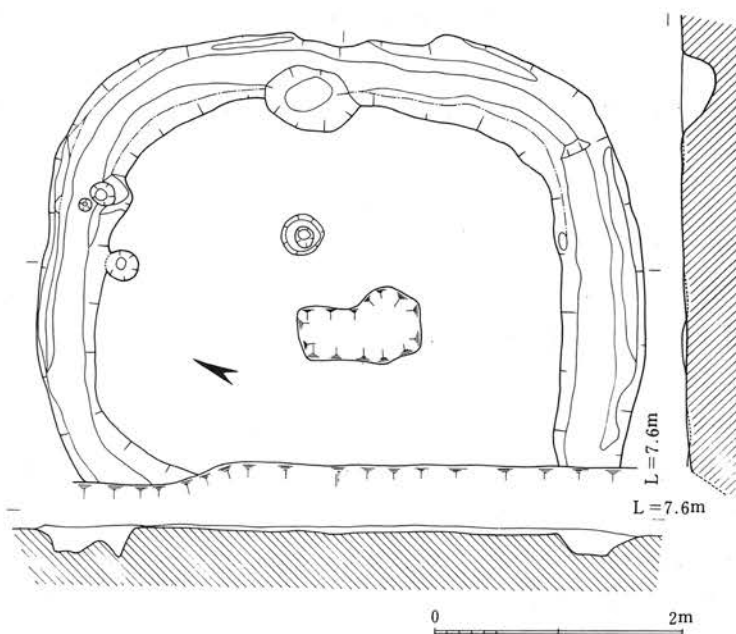


Fig. 29 SX002周溝状遺構実測図 (S = 1/60)

遺構中央部と周辺部に小穴が存在するが、この遺構に伴うものではない。中央部にある土塊状のものは攪乱である。

埋土はSX001に比するとやや淡い黒色土でこれも2層に大別でき、上層淡黒色、下層淡褐色であった。遺物は弥生土器と考えられる土器細片を微量に検出した。また、東溝中央部でガラス玉を検出したが、すぐそばに攪乱があったのでこの遺構に伴うものとの断定はできない。

SX003 周溝状遺構 (Fig. 30)

調査区中央西寄りであって、中心部の標高は7.4mを測る。遺構の南北外径3.2m、内径2.4m、東西外径3.8m、内径2.94mを測り、上面の平面形はやや東西に

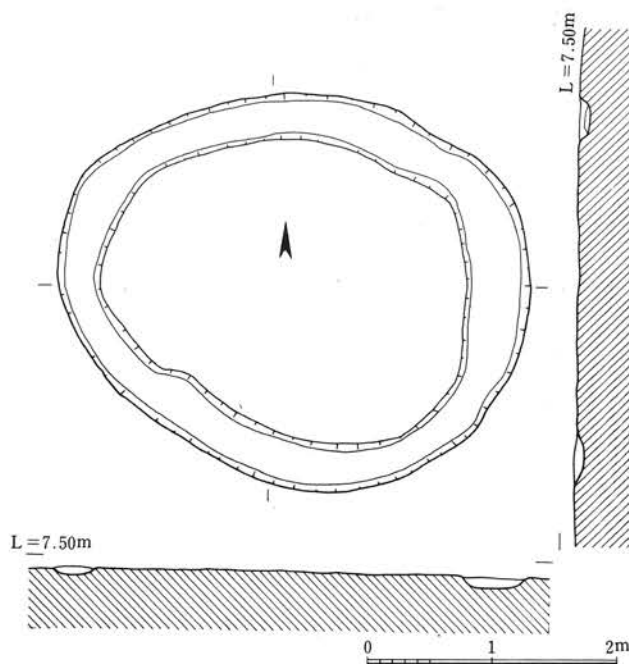


Fig. 30 SX003周溝状遺構実測図 (S = 1/60)

長い楕円形を呈する。溝幅は0.3から0.53m、深さ0.08から0.1mを測り、断面形は逆台形を基調としている。切合い関係は全くない。

埋土は黒色土の一層と判断した。出土器物は時期・器形が全く判断できない微細片を検出した。

(5) 井戸

調査区中央東端に3基検出した。この付近は東に隣する水田と同じ高さまで表土を除去した部分で、調査区内で最も低くなっている地点である。3基とも素掘の井戸である。

SE001 井戸 (Fig. 31)

調査区の北部にあり、掘込み面の標高は7.6m。上面の平面形は円形で、径1.2m、深さ1.43mを測る。掘込下0.7mの壁面に稜を有し、2段掘の様相を呈する素掘りの井戸である。床面は径0.5mを測り平坦である。壁は急角度に立ち上る。

埋土は黒褐色を基調とし、遺物は土器細片を検出したが、種別、名称は不明。

SE003 井戸 (Fig. 32)

調査区南部の東端にあり掘込み面の標高は6.8m。上面の平面形は円形を基調とするが、ややいびつである。長径2.8m、短径2.07m、深さ1.27mを測る。2段掘りで素掘りの井戸である。底面の断面は舟底状を呈し、壁は急角度に立ち上る。

埋土は黒色を基調とし、下層になるにつれて粘質度を増す。遺物は埋土中から微細片を検出したが形状不明。

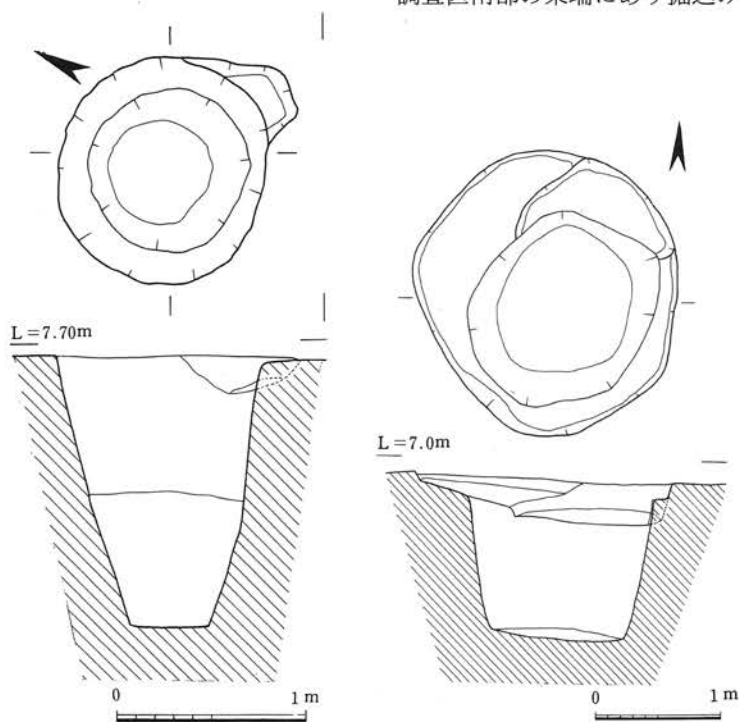


Fig. 31 SE001井戸実測図 (S = 1/40) Fig. 32 SE003井戸実測図 (S = 1)

SE004 井戸 (Fig. 33)

調査区南部の東端にあり、SE003 の 4 m 北に位置する。掘込み面の標高は 6.8m。上面の平面形は円形を基調とするが、北西部がややいびつである。長径 2.55m、短径 2.25m、深さ 0.86m を測る。素掘の 2 段掘りの井戸であるが、東部には水汲み場的なフロアーがあり、井戸の主体は西壁部に片寄っている。2 段目掘込み径約 0.8m を測る。底断面は舟底状を呈し、壁は直角に立ち上る。

埋土は粘質の黒色土を主体とし、下層になるに従い、黄色味を帯びる。遺物は弥生土器片、自然石、木片等を少量検出した。

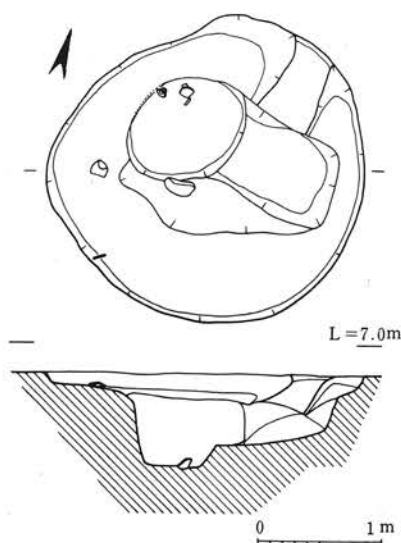


Fig. 33 SE004井戸実測図 (S = 1/60)

(6) 溝 (Fig. 52)

15条の溝を検出した。溝の位置、形状は Fig. 52 のとおりである。時期的には中世のものがほとんどである。ただ、SD014・015 については SB001 掘立柱建物に伴うものとしたら弥生時代であるが、これらの溝からの出土遺物はない。

溝の性格については幅・深さからみて排水・区画を目的としていたものとする。

(7) 立野遺跡出土遺物

弥生時代、中世の遺物を検出した。特徴的なものを図化し、その概要を後述する。基本的には出土遺構毎にとりあげている。

1 は壺の頸部。残存高 8.7cm。2 条の凸帯を有する。色調は茶褐色。SB004 の北東隅ピットから検出。2 は磨製石剣。残存長 11.1cm、最大厚 0.9cm、幅 3.6cm。表裏面共に石剣製作以外の磨きがあり、何らかのものに転用したものとする。3 は甕。復元口径 3.0cm、残存器高 4.3cm。色調は明褐色。竪穴住居の数少ない遺物。4 は磨製の石ノミ。残存長 14.3cm、幅 3.3cm。刃部付近の横方向の線は節理状のものでその線の内外が風化でわずかにくぼんでいる。5 は石包丁(未製品)。残存長 7.5cm、厚さ 0.7cm。6 は甕形土器。口径 18.4cm、器高 15.6cm、底径 12.8cm。わずかに上げ底気味の底部から体部は内湾気味に角度をもって立ち上り、偏平な口縁部へと至る。口縁下部外面には断面三角形の凸帯を有する。調整は主としてナデとヨコナデ。色調は明茶褐色で、比較的精製された粘土を用いている。7 は石包丁。残存長 11.4cm、最大厚 0.8cm。風化のため剝離が著しく、刃部は不鮮明。8 は器台。受部径 5.6cm、脚部径 7.5cm、器高 14.3cm。手捏様の作りである。調整は主としてナデと指頭圧による。9 も器台。8 と同程であるが指頭圧痕が明確に残る。11 は壺。口径 35.6cm、残存器高 15.4cm。頸部が明確にくびれ、口縁分は外反し

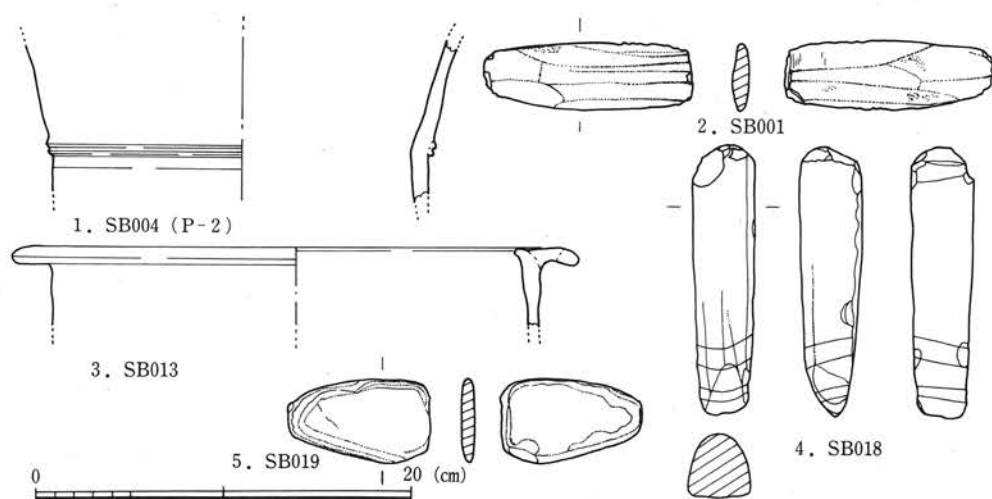


Fig. 34 立野遺跡出土遺物実測図(1) (S = 1/4)

て長くのびる。口唇部はヘラ状工具による横ナデ。口縁部外面には10から12条単位の暗紋を有する。色調は明茶褐色を呈する。調整は主としてナデとヨコナデによる。口縁内部の摩耗が著しい。12は鉢。口径25cm、器高19cm、復元底径11.4cm。わずかに上底状の底部から器体は内湾気味に立ち上り、平坦で短い口縁をもつ。口縁下部に1条の凸帯がある。調整は口縁部付近内外面がヨコナデ、他はナデによっている。色調は茶褐色。13は甕。復元口径24.8cm、残存器高10.5cm。体部は直線的に立ち上り口縁部に至る。口縁部は短く平坦で外側にのび、やや下方に傾く。内部はわずかに鋤状口縁の体をなす。調整は内面がナデとヨコナデ、外面がヨコナデと縦方向のハケ目。14は甕。13に比して体部がやや丸味をもつ。口径23.4cm、器高35.8cm、底径7.7cm。80%の残存率。底部はやや上底。色調は明褐色。15は石包丁。摩耗が著しく、刃部は殆ど残存していない。16から18は甕の底部。17が最も大きい法量をもつと考える。19は壺の胴部。残存器高10.6cm、底径8.3cm。最大径を胴部に有し球状を呈する。調整は外面胴部中央付近に横方向のヘラミガキ、他はナデとヨコナデによる。20も壺。残存器高は16.6cm、底径6.6cm。胴部に2条の凸帯を有する。器体の割に器壁が厚く、最大1.7cm。色調は褐色。21は高坏。実際の復元作業では接合部分が破損しているので接着できなかったが、同一個体である。坏部復元径20.8cm。推定器高18cm、脚部径16cm。口縁内部は鋤状口縁の体をなす。口縁部は平坦で下降気味に短くのびる。調整は主として坏部内外面がヨコナデとナデ、脚部外面ヘラミガキ、内面がナデによる。22は石斧の先端部。風化が著しく刃部はほとんど残存していない。23は陶器壺。復元口径7.4cm、残存器高2.8cm。全面に明茶褐色の釉がかかる。24は土師器坏。口径13.2cm、器高3.45cm、底径7.5cm。底部外面には糸切痕有。25は滑石製品片。27は石包丁の未製品。28から31は甕。口縁下部に凸部帯を有するものとそうでないものがある。29・31は凸帯のない甕。復元口径21.3・24cm、残存器高8.2・17cm。平坦で短い口縁をもち、体部は内湾する。外面体部に縦

方向のハケ目。他はナデとヨコナデによる。30は口縁下部に凸帯を有するもの。29に比して体部がより丸味をもつタイプ、復元口径14.5cm、残存器高7cm。茶褐色を呈し、胎土はきめ細かいものを使用。32は須恵器坏。高台径6.8cm、残存器高2.7cm。色調は内面淡灰色、外面・胎土は灰白色を呈す。須恵質の名称が適切か。33は磁器碗。復元高台径8cm、残存器高1.7cm。内面に乳灰色の釉。高台外面にはヘラ状工具による刻目有。34は鉢。復元口径13.2cm、器高7.5cm、底径5.9cm。わずかに上底の底部から、体部は内湾気味に立ち上り、口縁部はほぼ直立する。調整は口縁内外面ヨコナデ、他はナデによる。35は高坏。坏部復元径8.6cm、器高23.8cm、復元脚部径17.2cm。坏部は外側に直線的にのび、口縁部は平坦で、内側は鋤状を呈する。摩耗が器面全域に及んでいるが、脚部外面にヘラミガキ、口縁部ヨコナデ、坏部内面ナデが施されて

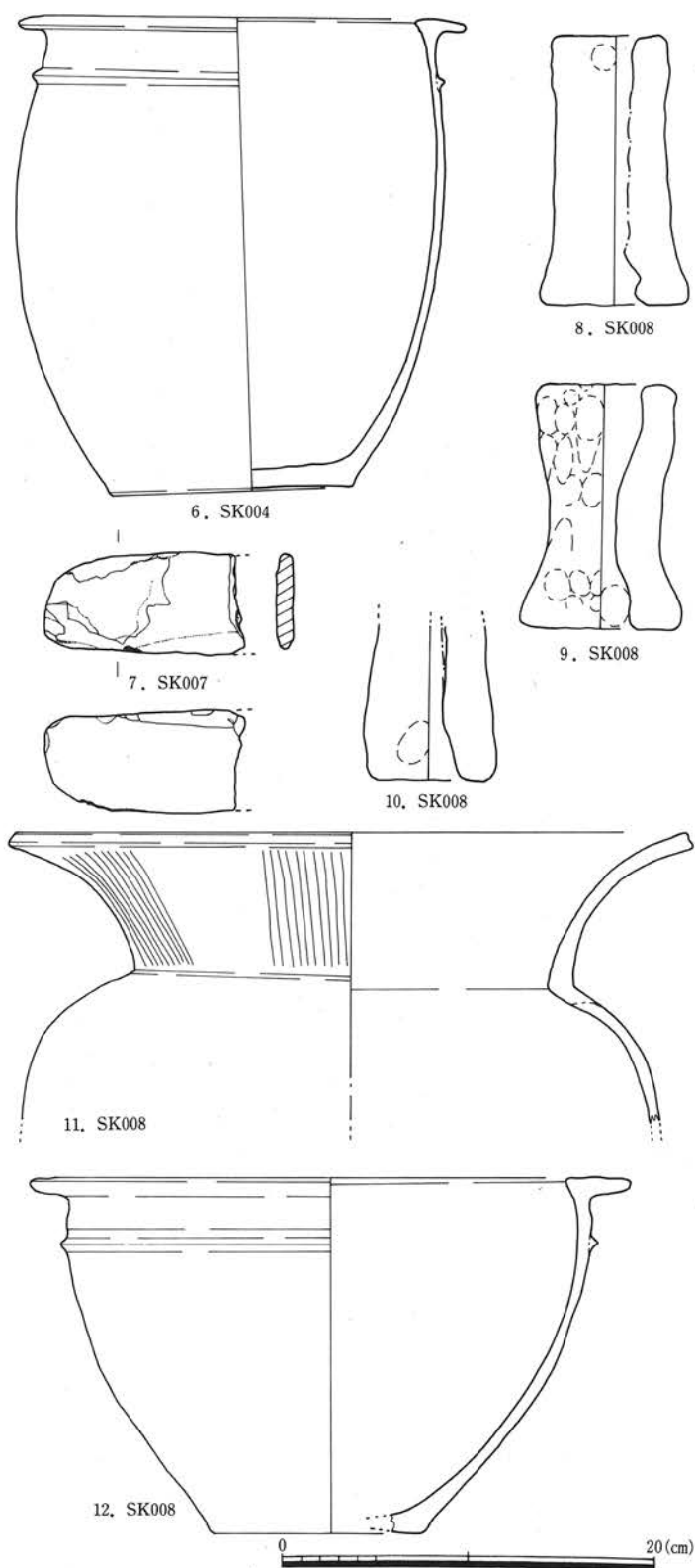


Fig. 35 立野遺跡出土遺物(2) (S=1/4)

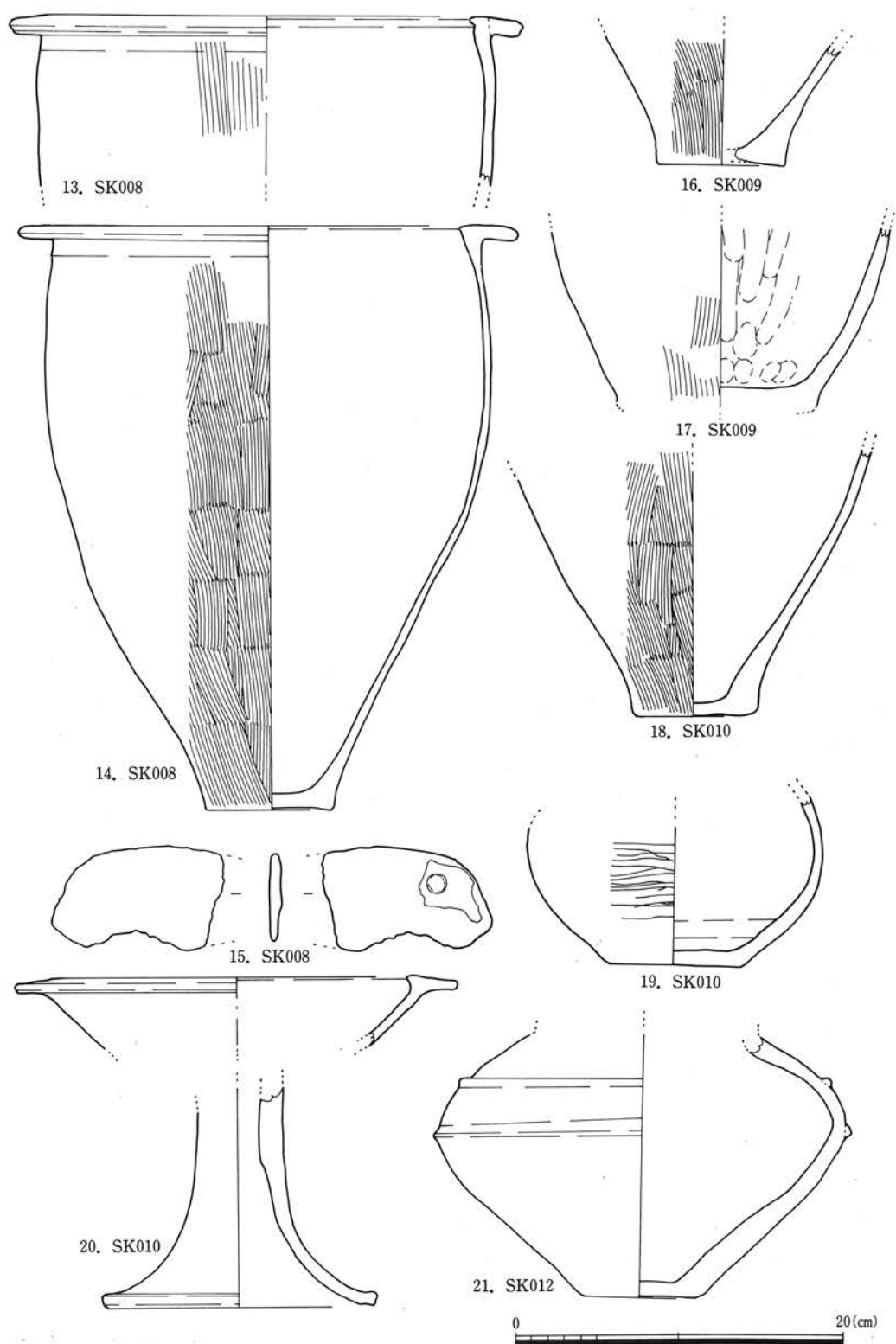


Fig. 36 立野遺跡出土遺物実測図(3) ($S = \frac{1}{4}$)

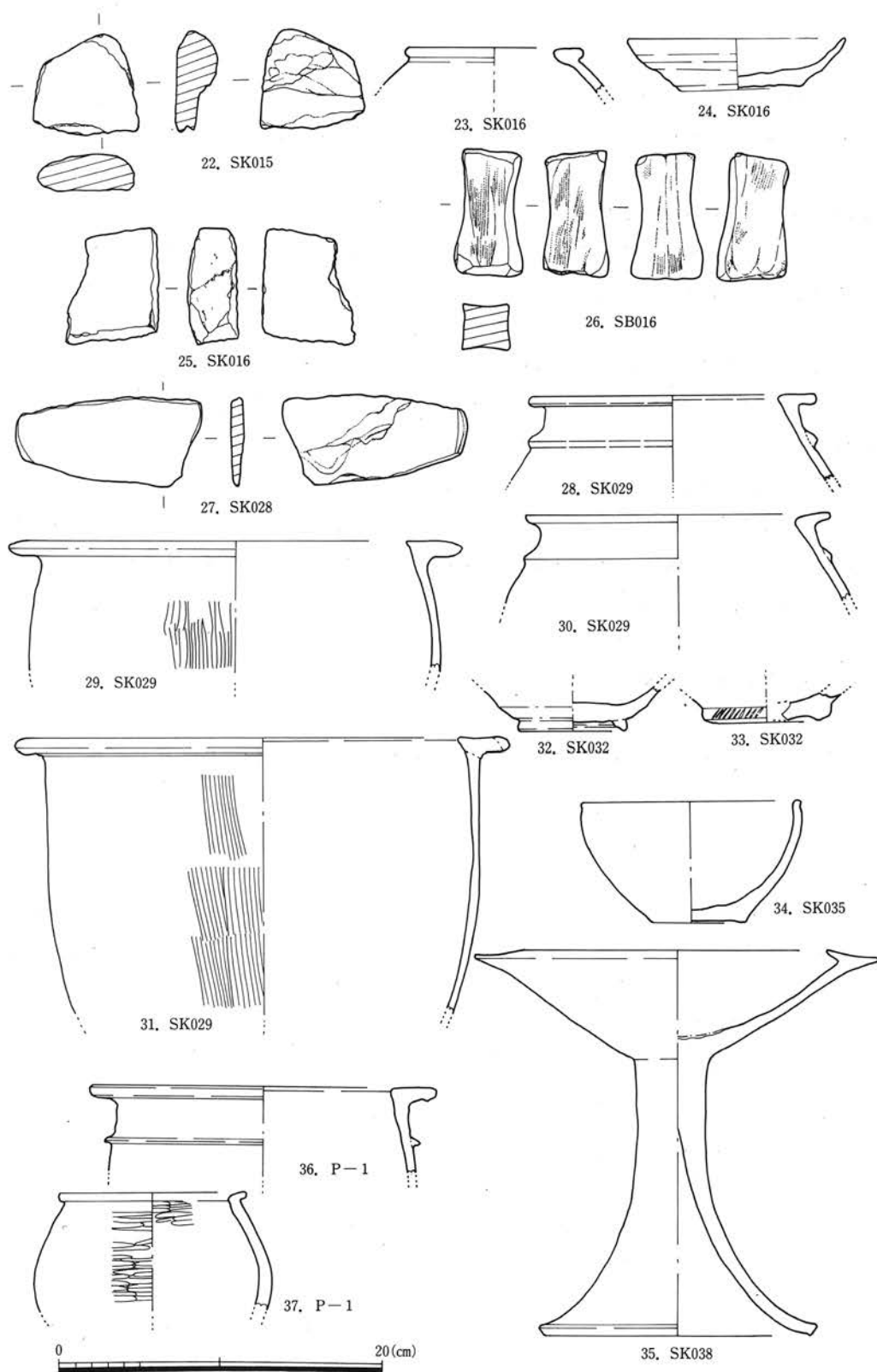


Fig. 37 立野遺跡出土遺物実測図(4)

いるのも観察できる。36は甕。平坦な口縁をもち、下面に1条の凸部帯を有する。37は壺。復元口径11.3cm、残存器高7.3cm。内湾する体部をもち、口縁部は短く外反する。調整は内面ヨコナデ、ヘラミガキ、ナデ、外面ヨコナデ、ヘラミガキを主体としている。色調は明茶褐色。38は器台。復元受部径10cm、器高16.9cm、復元脚部径13cm。受部と脚部の境がない、比較的小型のもの。調整は内面ヨコナデ、ナデ、外面ヨコナデ、ハケ目によっている。色調は淡褐色を呈し、胎土には径0.1cm程度の砂粒を含む。39・40は甕。底径8.4・8.5cm。器内面に黒色部分有。42も甕。小片のため径は復元できない。38から42はSX001の数少ない出土物である。43はガラス玉。径0.4cm。乳白色を呈する。SX002出土唯一の遺物。ただし、攪乱部に近接して出土。44は壺。復元口径15.6cm、器高15.2cm、底径10.4cm。上底気味の底部をもち胴部は大きく内湾しながらのび、口縁部に至る。口縁部は短く、外反する。器面調整は口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面横方向のヘラミガキ、内面ナデ、底部内外面共にナデによっている。色調は明茶褐色を呈し、胎土には径0.1cm程度の砂粒を含む。45は木杭。残存長8.7cm。先端にはケズリ痕が明瞭に残る。46は土師器小皿。口径8.9cm、器高1.9cm、底径7.2cm。底部外面には糸切痕が残る。SD001の時期を示す数少ない出土物。

2. 村徳永遺跡 (C地区)

(1) 土壌

16基検出した。規模・形状はまちまちであるが隅丸長方形を基調としたものが比較的多く見られる。

SK001 土壌 (Fig. 40)

調査区中央にあり、掘込み面の標高は7m。上面の平面形は隅丸長方形を呈する。長軸3.28m、短軸2.16m、深さ3.1mを測る。床面はほぼ平坦で四壁はなだらかに立ち上る。遺構内にピツ

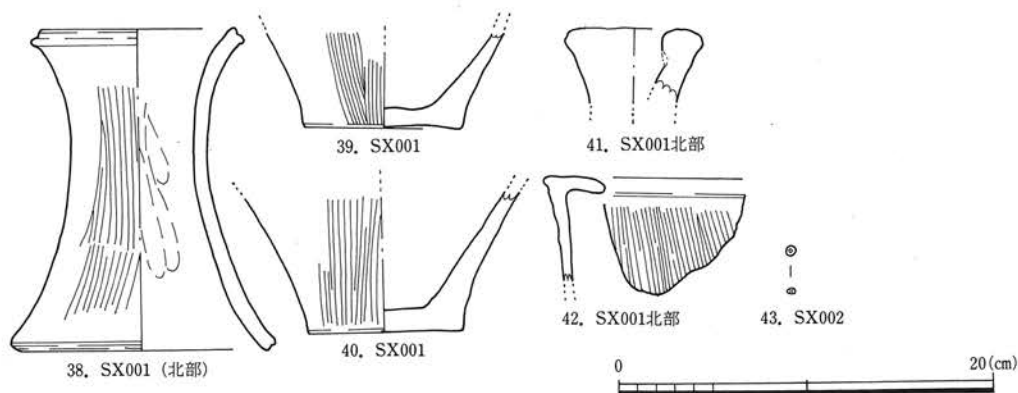


Fig. 38 立野遺跡出土遺物実測図(5)

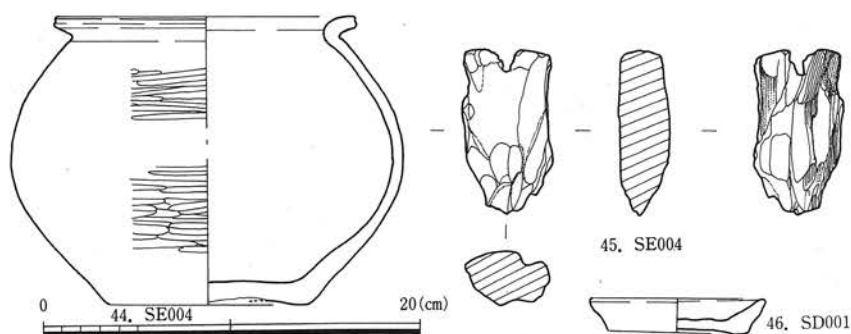


Fig. 39 立野遺跡出土遺物実測図(6)

トが6基存在するが、この遺構に伴う可能性のあるものは中央部の1基のみである。

埋土は暗褐色を呈し、下層になるに従い、黄色味をおび砂粒が混在する。遺物は土師質土器細片を埋土中から微量検出した。

SK002 土壇 (Fig. 41)

調査区中央東端にあり、SK004や多数のピットと切合っている、新旧関係は明確でない。掘込み上面の標高は7 m。上面の平面形は不定形であり、長軸5.9m、短軸2.2m、深さ0.14 mを測る。床面はわずかに起伏があるが、概ね平坦。壁はゆるやかにのびる。

埋土は暗褐色を呈し、土師器片を検出した。

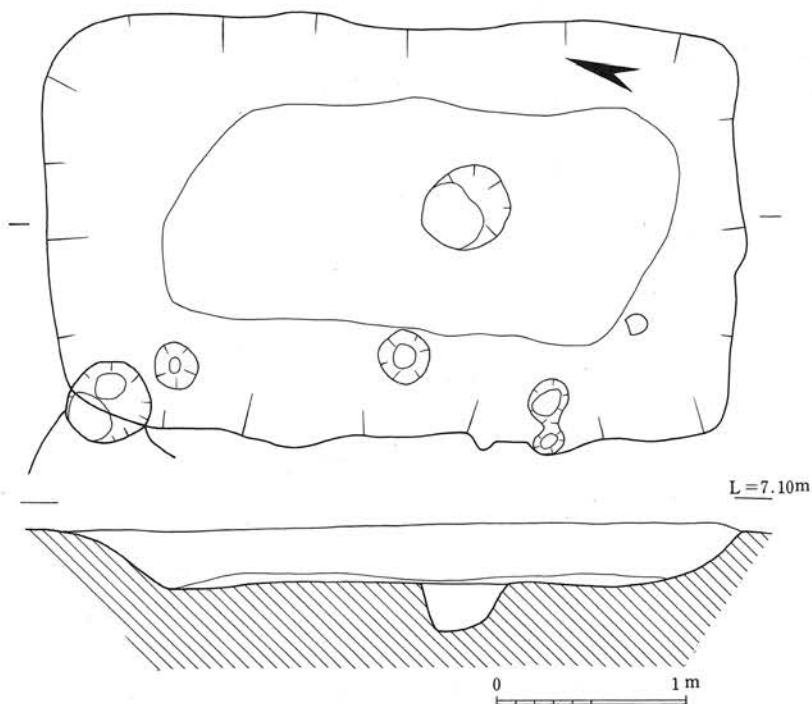


Fig. 40 SK001土壇実測図 (S = 1/40)

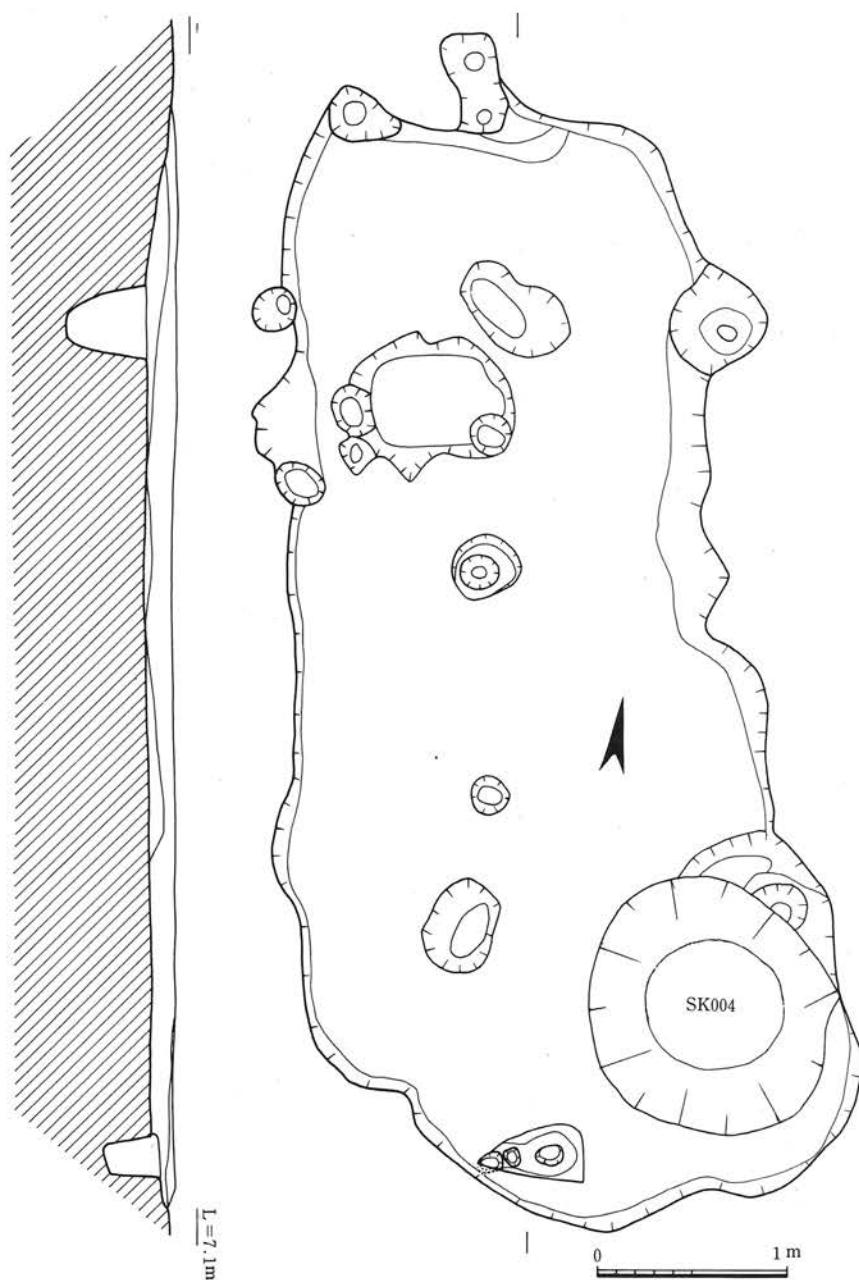


Fig. 41 SK002土壌実測図 (S = 1/40)

ピットに切られている。長軸1.05m、短軸0.82m、深さ0.44mを測る。床面は平坦で壁は内湾気味に角度をもって立ち上る。

SK003 土 壙 (Fig. 42)

調査区東端の中央にあり、掘込み面の標高は7m。上面の平面形は隅丸方形を基調とするが、ややいびつになっており、長軸1.8m、短軸1.73m、深さ0.23mを測る。床面には大小4基のピットが存在するが、この遺構に伴うかどうかは明確にできなかった。

埋土は暗褐色、出土遺物はない。

SK011 土 壙 (Fig. 43)

調査区の北西端にあり、掘込み面の標高は7m。上面の平面形は隅丸長方形を基調とするが短辺を両方とも

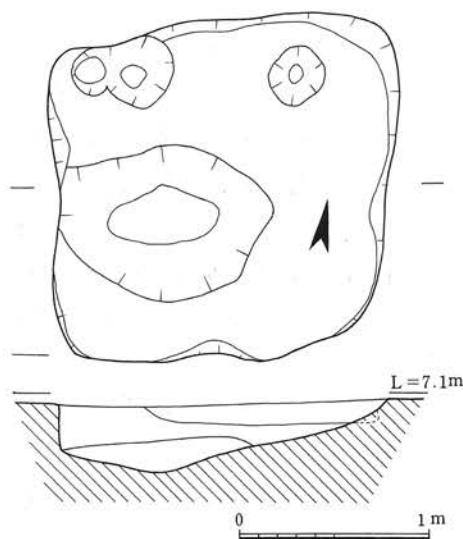


Fig. 42 SK003土坑実測図 (S = 1/40)

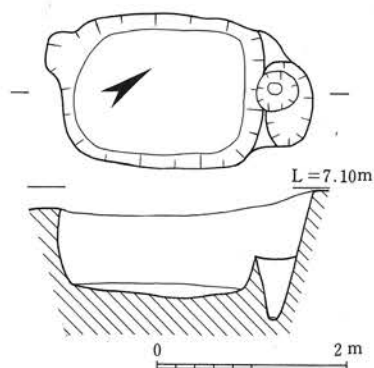


Fig. 43 SK011土坑実測図 (S = 1/40)

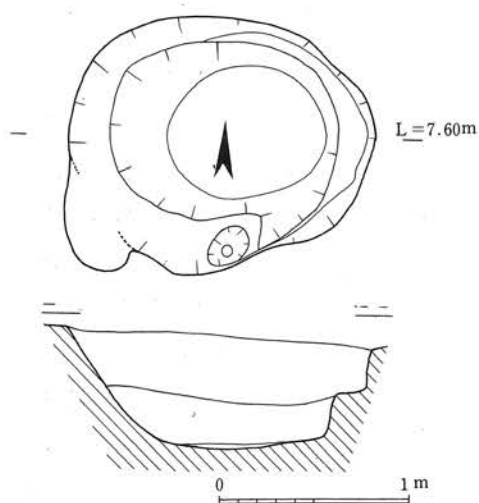


Fig. 44 SK012土坑実測図 (S = 1/40)

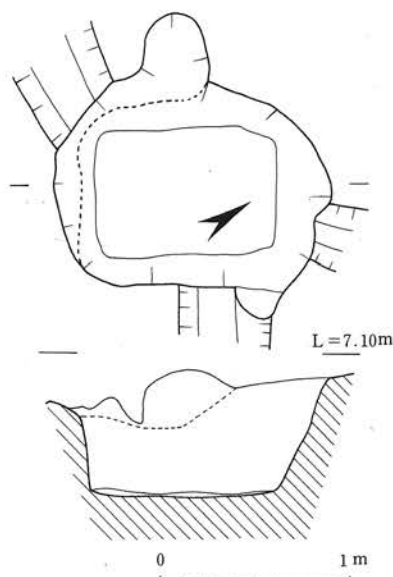


Fig. 45 SK014土坑実測図 (S = 1/40)

SK012 土坑 (Fig. 44)

調査区北部にあり、掘込み面の標高は7.1 m。上面の平面形は楕円形を基調とするが、2か所を小ピットに切られている。長径1.63m、短径1.31m、深さ0.6mを測る。南側掘込み下0.2m付近に狭い段があり、部分的に2段階掘の様相を呈する。床面は断面舟底状を呈し、壁は東側が急角度に、西側がなだらかに立ち上る。

出土遺物は土器細片を微量検出した。

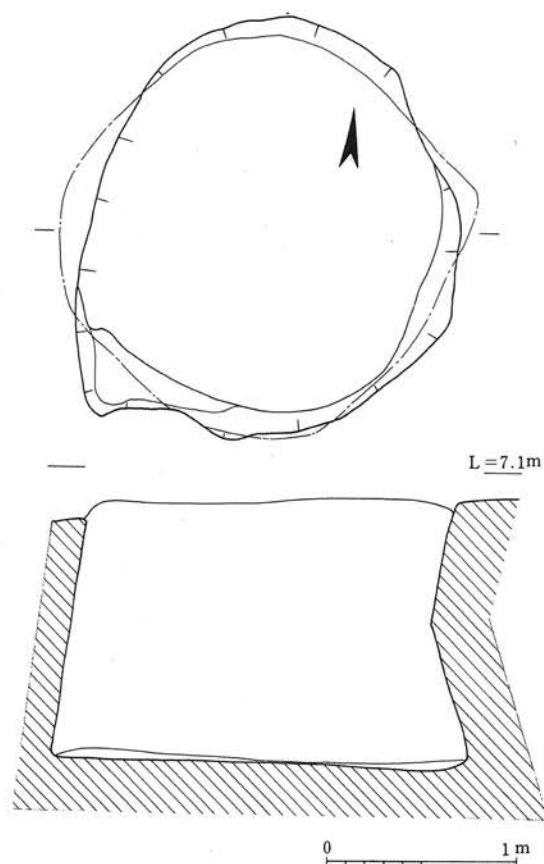


Fig. 46 SE001井戸実測図 (S = 1/40)

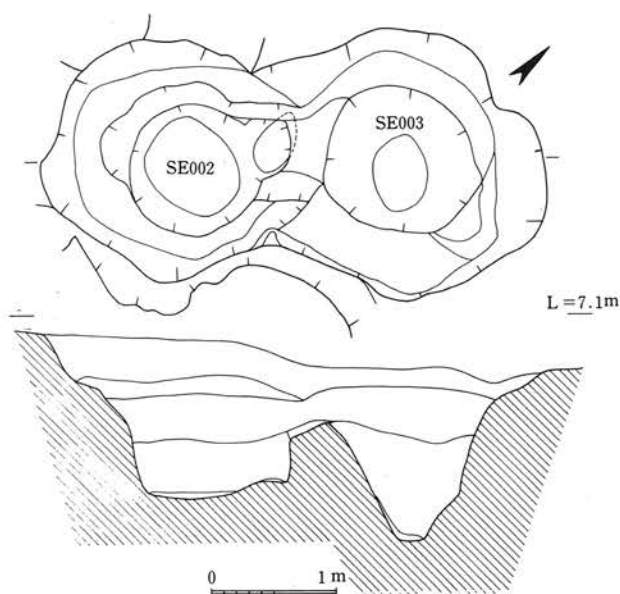


Fig. 47 SE002, 003井戸実測図 (S = 1/60)

SK014 土壌 (Fig. 45)

調査区西部にあり、掘込み面の標高は7 m。上面の平面形は不定形を呈するが、SD004、SD013、小ピットち切られているためである。長軸1.46m、短軸1.08m、深さ0.55mを測る。床面はほぼ平坦で壁は角度をもって立ち上る。

埋土は暗褐色、遺物は土器細片を微量検出した。

(2) 井戸

調査区南版部で4基検出した。いずれも素掘井戸である。

SE001 井戸 (Fig. 46)

調査区の南東隅にあり、掘込み面の標高は8 m。上面は円形を基調とするが、壁面及び掘込み面の崩壊によりややいびつな形である。長径2.18m、短径1.86m、深さ1.41mを測る。底面はほぼ平坦で淡灰色粘土層に掘込んでいる。壁は内傾気味に立ち上るが、これは崩壊のためである。

埋土は上層黒色、下層淡灰褐色を呈し、遺物は埋土中から土師器皿・坏、瓦器碗、木器等を検出した。

SE002・003 井戸 (Fig. 47)

調査区の東部にあり、互いに切れあっているが、新旧関係は不明。SE003は東半部上面を削平されている。上面の平面形は円形を基調と

するが、削平や遺構の切合い関係でいびつとなっている。
SE002 で南北径2.17m、深さ1.27m、SE003 で南北径2.2
m、深さ1.4mを測る。双方とも上面の平面形は似通っ
ているが、断面形は前者が逆台形状、後者がV字形状を呈
する。

埋土は黒褐色土を基調とするが、下層部は黄褐色砂粒
を多く含む。遺物は SE002 から土師器小皿、坏、SE003
から磁器碗（破片）、木器を検出した。

SE004 井戸 (Fig. 48)

調査区東部にあって、SD001・008 に上面を切られてい
る。上面の平面形は南北方向に主軸をもつ楕円形を基調
とする。長径1.47m、短径1.13m、深さ1.15mを測る。
素掘1段掘の井戸である。

埋土は黒褐色を基調とし、遺物は土師器小皿を数点検
出した。

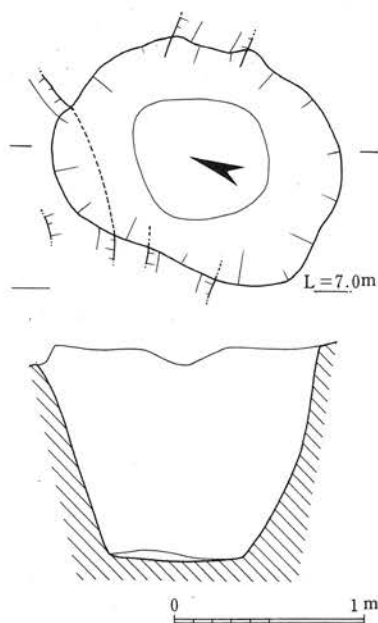


Fig. 48 SE004井戸実測図 (S = 1/40)

(3) 溝

調査区で13条検出した。中央部分を東西方向に走る溝が主なものであるが、上面を削平され、
原姿を止めていない。2条から3条の溝が切れあっているが、その新旧関係は明確にできなかつ
た。溝の深さは検出面から0.2から0.5m内外である。この調査区は村徳永遺跡A・B地区の東
に位置するが、全体図を見るかぎりでは、そこからのびてこの調査区の溝につながるものはない。

埋土は淡黒褐色を基調とし、砂粒を多含。遺物は土師質土器（鉢、小皿——SD001出土）、土
師器（坏——SD003出土）を検出した。

(4) 村徳永遺跡（C地区）出土遺物

主として中世の遺物を検出した。坏、碗、小皿が主流を占める。

47、48は土師器坏。復元口径12.55・12.15cm器高3.05・4cm、底径10.1・6.85cm。47の底部
には糸切・板目、48の底部にはヘラ切りの痕跡が観察できる。50・51は砥石。52は土師器小皿。
底部外面に板目を有する。復元口径10.8cm、器高1.4cm、復元底径9.45cm。53は土師器坏。底部
外面にヘラ切り、板目を有する。底径7.5cm。色調は明褐色。54は土師器坏。口径15.45cm、器
高3.6cm。口縁部をヨコナデ、その他はナデによる。色調は内面暗茶褐色、外面黒褐色。55・56・
57は土師器小皿。口径6.7から10.7cm、器高1.0から1.4cm、底径5.7から7cm。底部外面は55に

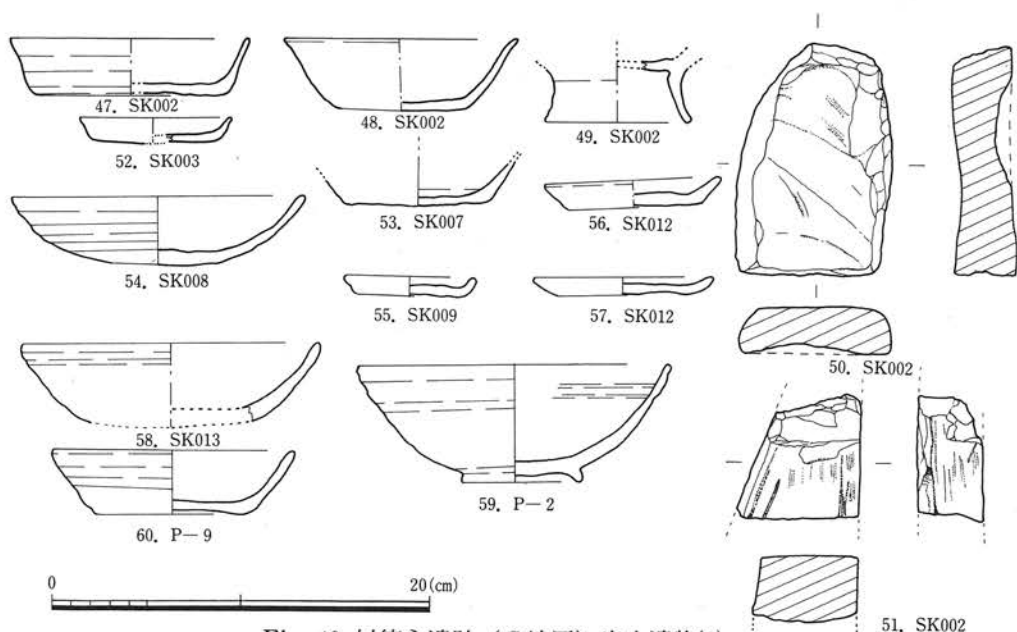


Fig. 49 村徳永遺跡 (C地区) 出土遺物(1)

糸切り痕、57にヘラ切り痕が観察できる。58は瓦器（埴か）復元口径15.6cm、残存器高4.1cm。全体にやや厚手の器体である。色調は内面淡黒色、外面灰褐色を基調とする。胎土に細かい雲母、砂粒を含む。59は瓦器埴。口径16.2cm、器高6.2cm、高台径6.3cm。低い高台をもち、体部は内湾気味に口縁部に至る。低部外面には糸切り痕を有する。色調は淡褐色を基調とし、外面一部に灰黒色部有。胎土は細かい砂粒を含む。60は土師器杯。口径12.55cm、器高3.45cm、底径8.1cm。上底状の底部には糸切り、板目痕を有する。色調は褐色を基調とし胎土は0.1cmから0.2cmの砂粒を含む。61から65は土師器小皿。62・64・65で、底部外面にヘラ切り痕を観察できる。口径7.85から8.8cm、器高0.9から1.25cm、底径7.3から7.95cm。66から71は土師器杯。口径14.55から15.3cm、器高3.15から4cm。66・69・70・71の底部外面にヘラ切り痕が認められる。調整は主としてロクロナデ、ナデによる。72から75は瓦器埴。口径15.4から16.6cm、器高5.5から6.0cm、高台径5.6から6.7cm。72の底部外面に糸切痕が観察できる。調整は主としてヘラミガキ、ヨコナデによる。76は曲物の底部。径を復元すると17cmから18cm程度。厚さ0.5cm。77・78は土師器小皿。復元口径8.25・8.7cm、器高1cm、底径6.95・7.4cm。78底部外面に板目痕有り。79は土師器杯。復元口径17.2cm、器高5.1cm、高台径5.7cm。比較的薄い器壁であり、口縁端部は丸味をもつ。色調は淡灰黒色を基調とする。80は青磁碗。復元高台径5.5cm。高台内部と畳付部以外は釉がかかる。81は木製品。名称は不明。残存長31.4cm、最大幅4.7cm、厚さ0.6から0.9cm。下方に3か所の穿口がある。82から85は土師器小皿。口径8.2cmから9cm、器高1.4から1.6cm、底径5.85cmから6.95cm。82はヘラ切り、83・84は糸切り。85は板目が底部外面に板目あり。

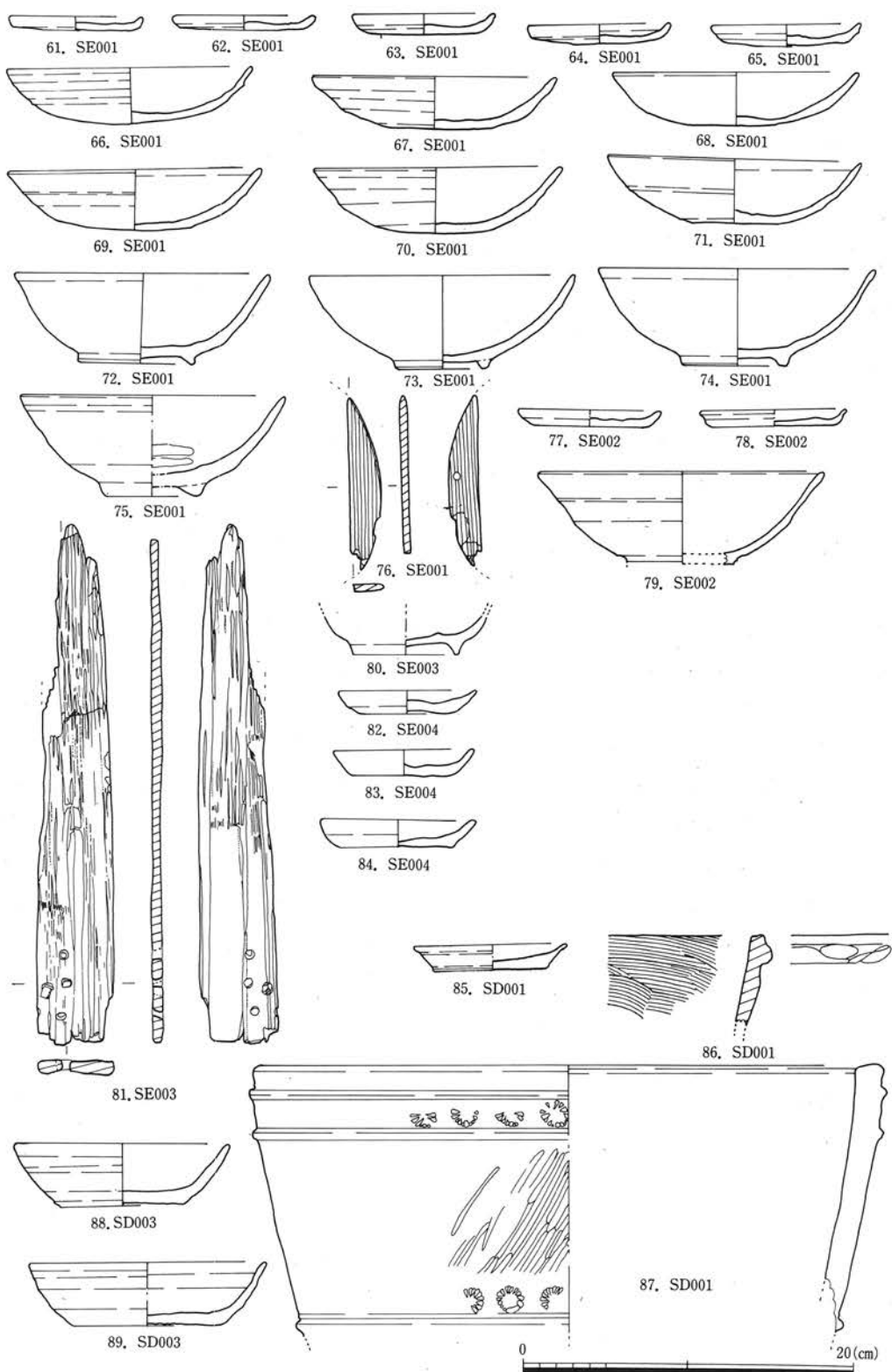


Fig. 50 村徳永遺跡 (C地区) 出土遺物実測図(2) (S = 1/4)

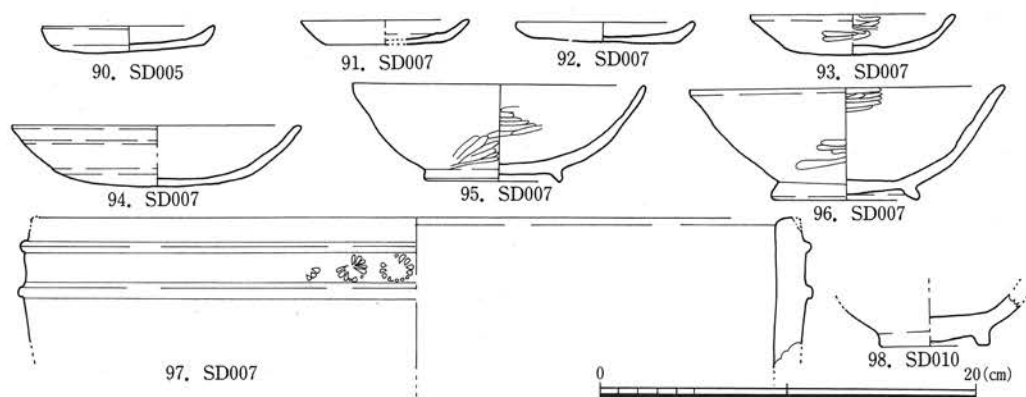


Fig. 51 村徳永遺跡出土遺物実測図(3)

86は土師質土器の甕。玉縁状の口縁をもつが均等に一巡している訳ではない。調整は内面横方向のハケ目、外面ナデによる。口縁部外面に一部スス付着。87は土師質土器の鉢。直立する口縁部をもち、器壁は厚く均一である。復元口径37cm、残存高16.2cm。口縁部外面に2条、胴部に一条の凸帯を有し、上から2条目と3条目の凸帯に接して花紋のスタンプがある。調整は主としてナデ、ヨコナデ、ヘラミガキによる。88は土師器坏。口径12.75・14.2cm、器高3.95・3.8cm、底径7.5・8.85cm。88の底部外面には糸切痕を観察できる。調整はロクロナデ、ナデによる。90から92は土師器小皿。口径8.4から8.9cm、器高0.9から1.55cm、底径6.1から8.1cm。91・92の底部外面には糸切り痕が観察できる。93は黒色土器の小皿。口径10.7cm、器高2.1cm、底径7cm、器高2.1cm。口縁部内外面ヨコナデ、それ以外は細からヘラミガキが施されている。色調は内外面共に黒色。94は土師器坏。復元口径15.2cm、器高3.2cm。色調は淡褐色を基調とするが、外面の一部が黒色。95は黒色土器の碗。口径15.4cm、器高5.2cm、高台径7.2cm。調整は内外面共にヘラミガキを施している。色調は内面黒色、外面明褐色を基調とする。96は黒色土器碗。全面黒色を呈す。口径16.5cm、器高6cm、高台径7.5cm。調整は内面は上半部ヘラミガキ、下半部ナデ、外面上半部ヘラミガキ、下半部回転ヨコナデによる。97は土師質土器の鉢。復元口径40.6cm。87と同種。色調は暗褐色を呈し、胎土には0.1から0.2cm程度の砂粒を多く含む。

まとめ

立野遺跡・村徳永遺跡（C地区）では多数の知見を得ることができた。この中で特筆すべきものを取りあげ整理をしてみたい。なお村徳永遺跡（C地区）は同遺跡（A・B地区）の中でその特徴を記載するので、ここでは割愛する。

1. 竪穴式住居跡

立野遺跡の比較的高い標高をもつ部分に南北に点在する。上面の平面形は隅丸長方形を基調とするもので、その規模により2種に大別できる。検出面から掘込みは非常に浅く0.1mから0.15mを測る。当初これらの住居跡を墳塋ととらえていた。しかし、後述する掘立柱建物跡群の存在や、これらの遺構（竪穴式住居）の配置等から考えて住居跡と認定した。

また、掘込み面の面積から次のように分類できる。A類16から18㎡（SB010・SB016）、B類7.5㎡から12.3㎡（SB014・SB022・SB013・SB008・SB009・SB020・SB012）C類5㎡前後（SB011・SB019）この外、調査区北半と南半に集中しているので占地状況でも分けられるが、これらの間が空白となっているのは削平された可能性もあるので、ここでは面積の比較にとどめる。これらを住居跡とすると以下に述べるのが特徴といえる。

(1) 隅丸長方形を基調とするものの規格性に乏しい。

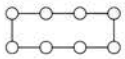
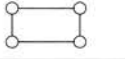
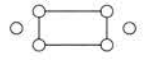
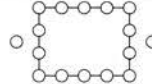
(2) 掘込みが浅い。これは近世から現代にかけての開墾・圃場造成等により削平をうけていれば当然のことであるが、調査区となっている丘陵全体を考えてみれば、旧来の姿を良く残しているものと判断され、元来、住居の掘込みは浅かったものとする。

(3) 住居跡床面には柱穴に想定できるピットが存在しない。

以上のようなことから考えると、長期間定住したものではなく、その造りも簡便なものではなかったろうか。

2. 掘立柱建物跡

調査区（立野遺跡）全域で13棟検出した。その検出地点は竪穴式住居同様、丘陵の背となる部分であるが、北部、中央部、南部の3域に集中して存在する。これらの建物跡を規模・柱穴数から分類すると下表ようになる。この掘立柱建物跡と竪穴式住居跡との切合関係はSB013

分 類	形 態	棟 数
A		1
B	a 	5
	b 	5
C		3

掘立柱建物跡とSB006竪穴式住居跡にしかなく、前者がこの部分だけでは古く観察できた。全体を概観すると、掘立柱建物跡と竪穴式住居跡は対応しており、グループで若干の時期差は想定できるものの、いわゆる住居と倉庫的な建物のとりあわせではなかったろうか。この住居跡の時期判定は、数個の柱穴から検出した土器片を参考にせざるを得ないが、それによると、弥生時代中期と考える。

3. 周溝状遺構

確実にこの名を使用できるものとしては、ここではSX001・SX002・SX003に限定しておきたい。この周溝状遺構という名称は、円形（方形）周溝墓を想定し、たまたま墓墳を検出できなかったものではなく、ここでは本遺跡のものにのみ使いたい。

本遺跡のものに周溝墓の名称を用いなかったのは次の理由による。

(1) 墓墳が中央部にあったとして、それが削平された可能性を論ずる時、この丘陵の旧地形がいかに残存しているかが焦点となるが1の住居跡の箇所でも触れているとおり、旧来の地形を良く残しており、削平を受けたとは考え難い。

(2) 住居跡群が存在しない部分に造営され、SX001に見るように溝中祭祀の痕跡があり、集落全体を概観する上で、集落内の祭場として想定できる。

この周溝状遺構は佐賀市域では初めてのものであるが、佐賀県内では当遺跡以外に8例あり、その概要は次のとおりである。

本遺跡で検出した周溝状遺構の時期は出土土器から見て弥生時代中期としたい。

遺 跡 名	所 在 地	文 献 等
町 南 遺 跡	三養基郡中原町大字原古賀字町南	佐賀県教委「町南遺跡」佐賀県文化財調査報告書第68集1983
中津・隈干飯遺跡	三養基郡比茂安町大字中津隈	佐賀県教委「佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書」佐賀県文化財調査報告書第83集1986
川 寄 吉 原 遺 跡	神埼郡神埼町大字竹	佐賀県教委「川寄吉原遺跡」佐賀県文化財調査報告書第61集1981
利田柳遺跡Ⅲ区	神埼郡神埼町大字竹	神埼町教委「利田柳遺跡Ⅲ区」神埼町文化財調査報告書1980
田手一本黒木遺跡	神埼郡三田演町大字田手	佐賀県教委「佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書2」佐賀県文化財調査報告書第74集1984
西山田三本松遺跡	佐賀郡大和町大字川上字三本松	佐賀県教委「九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報9、10
西山田二本松遺跡	佐賀郡大和町大字川上字二本松	同上概報10
池上二本松遺跡	佐賀郡大和町大字池上字二本松	大和町教委現在報告書作成中

4. 大型土壇

泉三本栗遺跡（昭和61年度調査、佐賀市久保泉町）、大日遺跡（昭和63年調査、佐賀市久保泉町）について、佐賀市域で3箇所目の検出例である。泉三本栗遺跡ではこの遺構の特徴を、(1)南北に長い丘陵上にあり、主軸を東西方向にとる。(2)隅丸長方形を基調としてきている。(3)鎌倉期の所産である旨の報告をしてきたところであるが、当遺跡のそれもほぼその条件に合致す

る。ただし、時期に関しては大日遺跡の例を見るとさらに遡るものもある。

遺構上面の面積は泉三本栗遺跡のもの4.3㎡から7.4㎡（同報告書にある4.8㎡から9.0㎡をこの数字に訂正する。）大日遺跡、7.8㎡、立野遺跡10.6㎡から14.7㎡。

この遺構の性格については今回もその確証となるべき資料を得られなかったので断定はできない。しかし、SK033の土層断面に見るように『版築』ともいうべき埋土堆積状況が示すように、『埋める』という行為があった可能性を提示しておきたい。

また、この遺構の名称は、その性格が究明された時に決定できると思うが、当分はこの名を使用したい。このことについては研究者諸兄の助言・指導を乞うものである。



Fig.52 村徳永遺跡(C地区)遺構配置図(1/200)

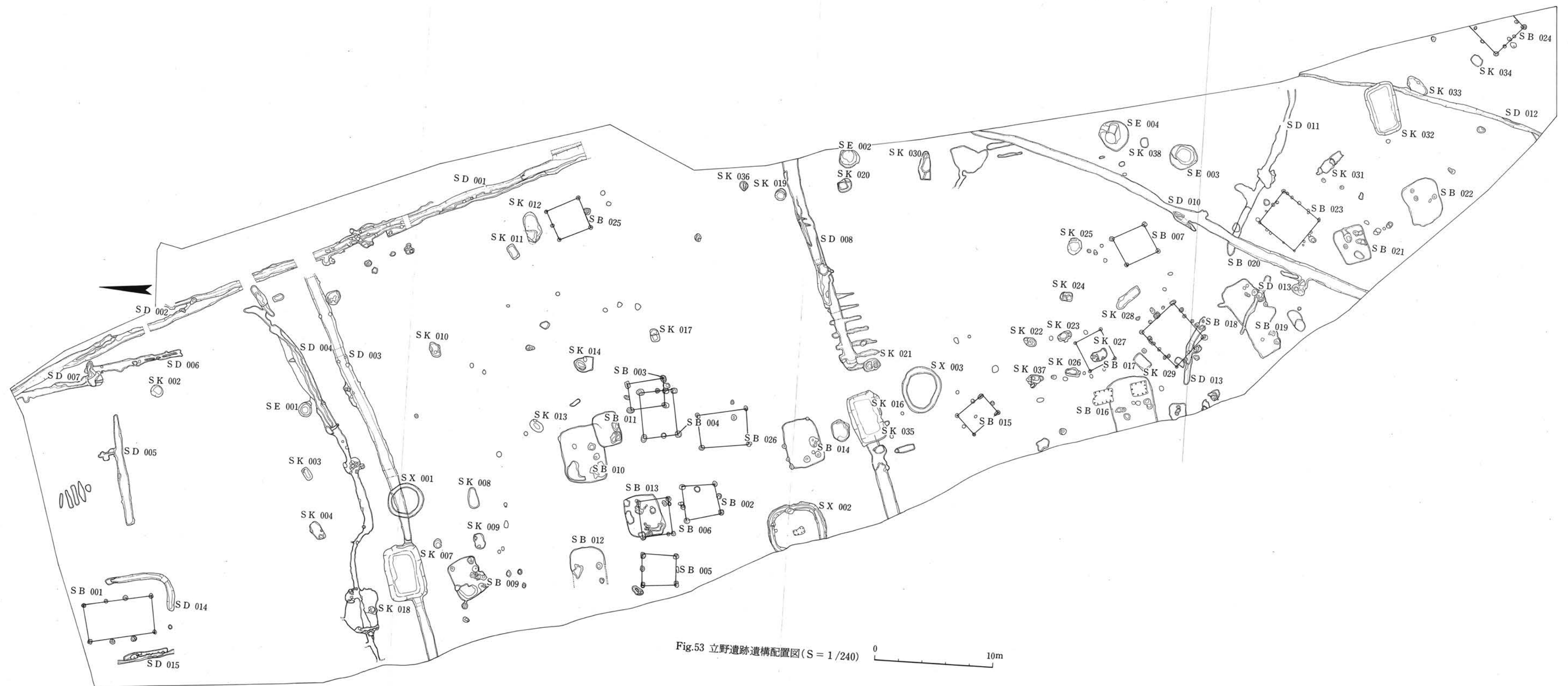


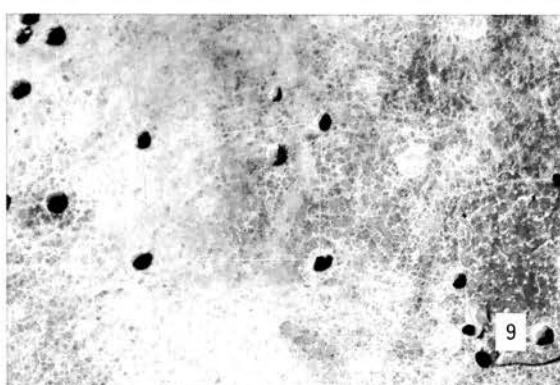
Fig.53 立野遺跡遺構配置図(S = 1/240)

0 10m

図 版

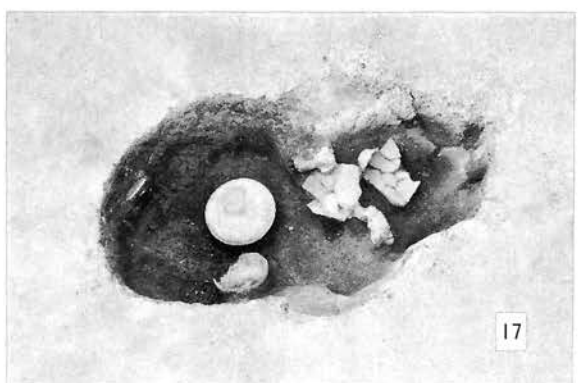
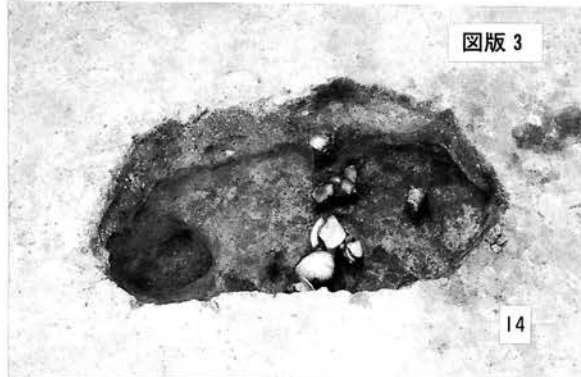


立野遺跡全景



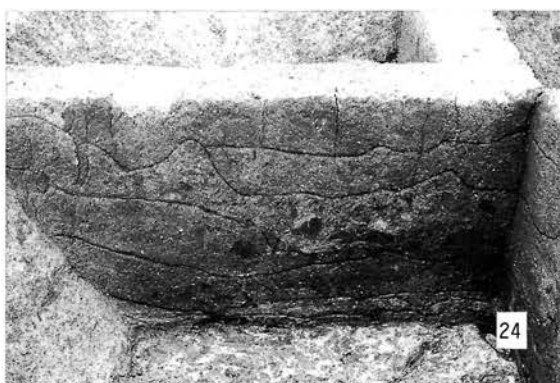
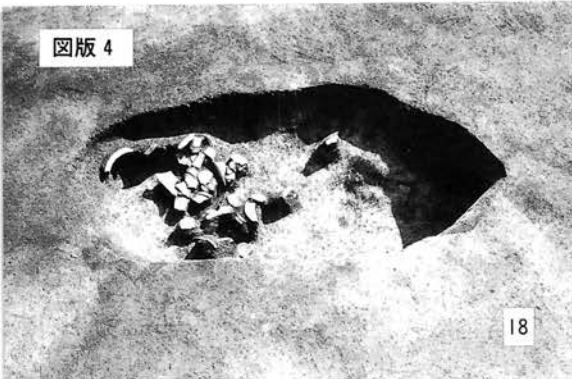
- 2. SB001 掘立柱建物跡
- 3. SB003・4 掘立柱建物跡
- 4. SB015 掘立柱建物跡
- 5. SB017 掘立柱建物跡

- 6. SB018 掘立柱建物跡
- 7. SB023 掘立柱建物跡
- 8. SB025 掘立柱建物跡
- 9. SB026 掘立柱建物跡



10. SB010•011 堅穴住居跡
11. SB011 堅穴住居跡
12. SB016 堅穴住居跡
13. SB019•020 堅穴住居跡

14. SK004 土壙
15. SK008 土壙
16. SK009 土壙
17. SK010 土壙

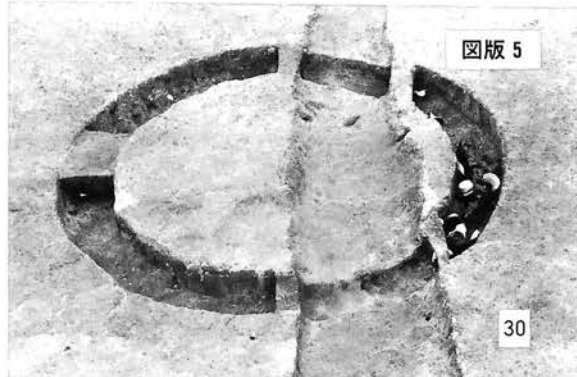


18. SK012 土壤
19. SK019 土壤
20. SK029 土壤
21. SK033 土壤

22. SK034 土壤
23. SK007 大型土壤
24. SK007 大型土壤土层断面
25. SK007 大型土壤土层断面



26



30



27



31



28



32



29



33

- 26. SK016 大型土坑
- 27. SK032 大型土坑
- 28. SK032 大型土坑土層断面
- 29. SK032 大型土坑土層断面

- 30. SX001 周溝状遺構
- 31. SX001 周溝状遺構遺物検出状況
- 32. SX002 周溝状遺構
- 33. SX003 周溝状遺構



村德永遺跡（C地区）



発掘調査状況



4



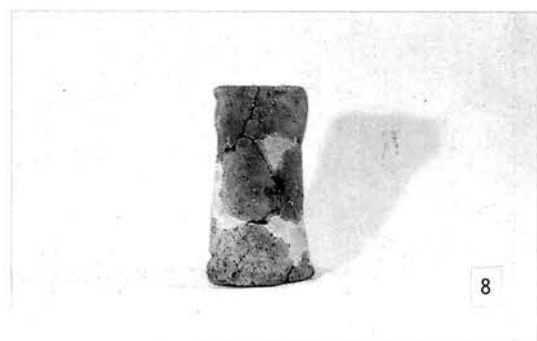
5



6



7



8



9



11



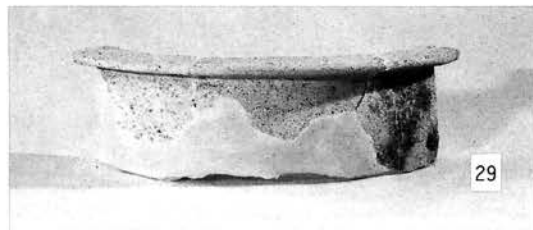
12



13

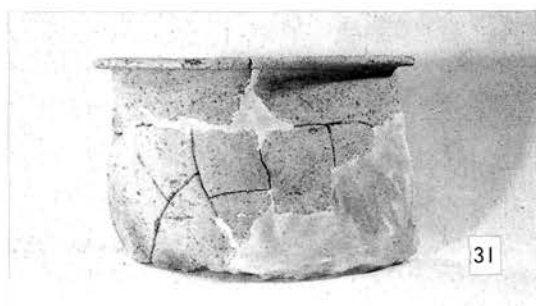
4. SB018 出土
5. SB019 出土
6. SK004 出土
7. SK007 出土
8. SK008 出土

9. SK008 出土
11. SK008 出土
12. SK008 出土
13. SK008 出土



- 14. SK008 出土
- 15. SK008 出土
- 17. SK009 出土
- 18. SK010 出土

- 19. SK010 出土
- 20. SK010 出土
- 21. SK015 出土
- 22. SK015 出土
- 24. SK016 出土
- 29. SK029 出土



31. SK029 出土
34. SK035 出土
35. SK038 出土
36. P-1 出土
38. SX001 出土

40. SX001 出土
44. SE004 出土
46. SD001 出土
50. SK002 出土
51. SK002 出土
54. SK008 出土



59



70



60



71



61



72



62



73



63



74



66



75



69

- 59. P-2 出土
- 60. P-9 出土
- 61. SE001 出土
- 62. SE001 出土
- 63. SE001 出土
- 66. SE001 出土
- 69. SE001 出土

- 70. SE001 出土
- 71. SE001 出土
- 72. SE001 出土
- 73. SE001 出土
- 74. SE001 出土
- 75. SE001 出土



79



93



82



94



83



95



84



96



87



97



92

79. SE002 出土
82. SE004 出土
83. SE004 出土
84. SE004 出土
87. SE001 出土
92. SD007 出土

93. SD007 出土
94. SD007 出土
95. SD007 出土
96. SD007 出土
97. SD007 出土

佐賀市文化財調査報告書第24集

立野遺跡
村徳永遺跡（C地区）

平成元年 3 月31日

発行 佐賀市教育委員会
佐賀市栄町1番1号

印刷 (株) 宮地印刷
佐賀市長瀬町11-20